
陸士訓練学校のドタバタな日常

ラモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陸士訓練学校のドタバタな日常

【Nコード】

N5850X

【作者名】

ラモン

【あらすじ】

管理局の魔導師を目指す少年少女たちが集う、第4陸士訓練校。これはその訓練校の日常を描いた、ドタバタ学園コメディである。基本的に「こまけえことはいいんだよ！」の精神でお読みくださいませ。

皆様の暇つぶしにどうぞ。

第1話 『朝8時だよ！ 全員集合！』（前書き）

いよいよ始まりました、コラボ小説『陸士訓練学校のドタバタな日常』。

他作者さんのキャラクターが沢山出演していますので、その全員を魅力的に書けるかどうか心配ですが、全力でやってみたいと思います。

では、『陸士訓練学校のドタバタな日常』が始まります。

第1話 『朝8時だよ！ 全員集合！』

時空管理局が運営する第4陸士訓練校。

この陸士訓練校は、様々な意味で数ある訓練校の中でも名の知れた訓練校だった。

様々な意味で、というのは文字通り良い意味も悪い意味も含んでいる。

良い意味は、数多くの優秀な陸士たちを輩出していること。

講師陣に未だ現役で最前線に出ている、歴戦の管理局員が居ること。

総じて訓練校とは思えないレベルの人間が揃っていること。

これだけ聞けば、さぞかし優秀な訓練校なのだと思うだろう。

しかし、この第4訓練校の管理局内での評判は、実はそれほど良くはなかったりする。

何故か。

それは——まあ、これから語るこの第4陸士訓練校の日常を見ていただければ分かることだろう。

●陸士訓練学校のドタバタな日常
第1話 『朝8時だよ！ 全員集合！』

「やっぱ時代は“けいおん！”だと思っわけよ。

正直音楽とか全くわからん俺だが、とりあえず漣たんと同じベイス買った。

目指せ武道館ライブ！！むしろ世界進出！」

訓練校のある教室の中央で、短めの金髪を揺らす少年——ハヤト「ロックウエルが新品のベースを持ち、得意げな顔をしてポーズをとっていた。

ただし持ち方は完璧に間違っていたりするけれど。

「放送終了と共にネットオクに出品されてる未来が見えるぞ。それとお前右利きじゃん。

「つか、お前先々週まで「時代はハチワンダイバー」とか言っって、将棋やってたじゃねーか」

そんなハヤトを見て溜息を吐くのは、ハヤトと同じ金色のくせっ毛を持った少年、ルーク「リーゼンベルグだ。間違った持ち方のままポーズを決めるハヤトを見ようとせずつ、手元で広げた漫画に視線を落としたままルークは言葉を続ける。

「先月あたりは「時代はARIA」とか言ってゴンドラ漕ぐ練習してたし、その前は「時代はバンブーブレイド」って剣道やってたし、もうオチが見え見えすぎて泣けてくるわ」

「いや、今度は本気だ！ やつと気づいたんだよ、俺は澪さんの生まれ変わりだつて！」

「死んでねーし、いやそもそも生きてねーし、お前男だし」

「ふざくんな！ 澪さんはいつでも生きてるんだよ！ 俺の胸の中で！..」

「末期的な会話すんじゃないよ。あと“けいおん！”ならあずにゃんだろ」

「ちっばいに用はない！」

「おっばいに貴賤はない、ただそこにおっばいという概念があるだけ。」

その程度の事にも気づけんとは情けない、いい加減目を覚ましたらどうだハヤト？」

「大きい正義！ 貴様こそ目を覚ませルーク！」

何故か芝居がかった口調でぎゃーぎゃー言い合うハヤトとルーク。そんな2人の言い合いを遠くから眺めつつ、オレンジと紫のオッドアイを持った少女が、セミロングの黒髪を揺らして溜息と共に小さく呟く。

「……あやつらは何をしょーもない会話をしとるんじゃ、朝も早いというに」

やや年寄り臭い口調で呟いた少女の名は、高町ゆず。

自分の机に肘を突いてハヤトとルークのやり合いを眺める姿は、やや年寄り臭い口調も相まって本来の年齢よりも年上のような印象を受ける。

「知らないわよ。3馬鹿のスケベ共の会話なんて」

「ティア、それは酷いよ……まあ、あたしもそう思っけど」

呆れ返った表情をするゆずの言葉を受けて溜息と苦笑をもらすのは、橙色のツインテールが特徴的な少女——ティアナⅡランスターと、青いショートカットの活発そうな少女、スバルⅡナカジマの2人。

そんな3人の視線の先で、ハヤトとルークの議論は白熱していく。もちろん、果てしなくしょーもない方向に。

「なんでちっばいを否定する!? これでは、ちっばいの需要が減ってエロゲが少なくなる!」

エロの冬が来るぞ!—」

「ちっばいを肯定する者は胸ならば何でもいいとしか考えていない、

だから抹殺すると宣言した！」

「エロがエロに罰を与えるなどと……！」

「私、ハヤト」ロックウエルが肅清しようというのだ、ルーク……！」

「エゴだよそれは……！」

「むしろエロじゃね？」

「誰がうまいこと言えと」

間違った方向に熱くなる2人のボルテージが最高潮に達した頃、見計らったようなタイミングでハヤト達の教室の扉が開き、短く揃えられたブラチナブロンドを揺らす少年が入ってきた。

少年の存在に気づいたティアナ達は笑みを浮かべ、彼の名前を呼びながら手を振る。

「リオス、おっはよう……！」

「おはようなのじゃリオス」

「おはよ、今日は遅かったわね」

「あ、うん。おはよう、スバル、ゆず、ティアナ」

名前を呼ばれた少年——リオス」コーネルドは、誰もが見とれる

ような柔らかな微笑みを浮かべ、それから自分の登場にも気付かず、いまだに言い合いを続けているハヤトとルークへと視線を移しながらティアナ達の隣になる自分の席へと腰を下ろした。

そして視線をハヤトとルークに固定したまま、ティアナ達に向かって短く尋ねる。

「……また？」

「また、よ。朝っぱらから元気よね」

「ほんにのう。もう少し静かにしてもバチは当たらんじやろくに」

「あはは。まあ、あたしは元気でいいなって思っけど」

ティアナとゆずが揃って嘆息し、スバルは苦笑いを返す。

「ほれリオス、はよう止めてくるのじゃ。あやつらの後始末はお主の役目じゃろ」

「ゆずの僕に対する認識は甚だ遺憾だけど、否定できないのが悔しい……」

「遺憾とかはどうでもよい、はよう止めてきやれ」

「ううう……なんで幼馴染ってだけで僕が……」

「宿命と書いてさだめ、というヤツじゃな。なに、ちょっと行って

止めるだけじゃろ？

何も姉上と戦って勝てと言ってる訳でもなし、男ならささつと行くのじゃ。ほれほれ」

追い払うようなゆずの手つきに促され、リオスはガツクリと肩を落とし、トボトボと重い足取りでルークとハヤトの方へと近づいていく。けれど2人は既に周りの事など気にならない程にヒートアップしているらしく、真横までやってきたリオスに気付く気配は無い。

「ねえ、2人とも」

「そうか……！　しかしその希少価値をもったちっぱいが、ロリコンを生み出すんだ！

それを分かるんだよルークッ……！」

「分かってるよ！　だから、世界にロリコンの心の光を見せなければならぬんだろ！」

「ねえってば、ハヤト、ルークも」

言葉だけでは気付いて貰えないと悟り、ハヤトとルークの服を引っ張ったりするリオスだが、それでも2人は気付かない。ここまできるとわざと無視しているのかと思う程なのだが、実際はただ単にヒートアップしすぎて本気で気付いていないだけだったりする。

「ちっぱいは！　人間のエロ全部を飲み込めやしない！」

「おい」

「ちっぱいの良さはそんなもんだって、乗り越えられる!!」

「もしもし」

「ならば、今すぐロリコン共すべてに叡智を授けてみせる!」

「ルークさん、ハヤトさん」

「お前をやってから、そうさせてもらうつ!!」

「……駄目そうんだけど」

何度声を掛けても気付かぬ2人に、諦めた表情を浮かべて助けを求めるようにティアナ達を振り返るリオス。しかし、返ってきたのは無常な言葉だけだった。

「頑張れ」

「頑張きなさい」

「頑張るのじゃ」

「酷いよ3人とも……」

ニコニコと満面の笑みで手を振る3人に悪態を吐いてから、もう一度ハヤトとルークの方に向き直る。

どう頑張っても、こうなった2人を止められる筈がないと長年の付き合いで分かっているのだが、ハヤト達を止めるように言われた手前、無理とわかっていてもやらないと後が怖い。

ハヤトとルークだけが馬鹿騒ぎをしても、何故か最終的には幼馴染の自分まで一緒にたに説教されてしまうのだから。

「……よし」

諦めから一転、覚悟を決めたと小さくガッツポーズをして、リオスはもう一度ハヤト達に声をかけようと口を開こうとした……が。

「朝っぱらから何を大声出してるのかしらね、アンタ達は」

「あいだっ!？」

「ぎゃふっ!？」

それよりも先に、いつの間にか教室の中に入ってきていた濃いブラウンのセミロングを揺らす女性が、手に持っていた黒い名簿でハヤトとルークの頭を思い切り引つ叩いた。

スパーン! という小気味良い音とハヤト達の悲鳴が教室に響き、その音の大きさに驚いたリオスは口から出そうとしていた言葉を飲み込んだ。

「うっおおお……」

「いつてええ……」

「全くこれだからあんた達くらいの男は嫌なのよね。ほらほら、そんなところで痛がってないで、教室の隅っこにでも行っ行ってくれない？ 朝から私のテンション下がっちゃうでしょ」

叩かれたハヤトとルークに冷たい視線を送りつつ、うえうえと舌を出す女性。

この女性の名前は左^{ひだり}舞^{まい}。第4訓練校の教官を務める1人であり、ハヤト達の担任でもある女性だ。付き合いやすい人柄で、訓練生からは人気がある。

ただ、ハヤトとルークの2人からの評判だけはすこぶる悪いのであった。

「おはようございます、左教官」

「はい、おはようリオス。その馬鹿2人の面倒、ちゃんとやってよね。幼馴染なんだし」

「幼馴染だからって面倒をみる必要は……いえ、わかりました」

ひらひらと手を振る舞の主張に反論しようとして、リオスはそのまま諦めたように溜息を吐く。

このあたりは、子供の頃からハヤトとルークの幼馴染として育つ

てきたリオスにしかわからない、一種の諦めというものだろうか。

「ほら2人とも、いつまでも大げさに痛がってないで席に戻ろうよ」

「痛がつてんじゃねーよ、ガチでいてーんだよ。手加減しねえとか
どいう了見だ、あの不良教官」

「まったくだぜ。あの教官、馬鹿力で遠慮なくぶん殴りやがって」

「2人ともそんなこと言っちゃだめだよ。教官に聞こえたら怒られるよ？」

「残念ながら聞こえちゃってるよ馬鹿。そんな酷いこと言われると、舞さん悲しくって思わずアンタ等の内申を最低値にしちゃうかもしれないー。そしたら進級はどう頑張っても絶望的かなー。

私としても本意じゃないけど、シヨックで思わずだから仕方ないよねー」

「横暴だ！ 権力の無駄遣いだ！」

「弱みを握って脅すなんて教官のすることじゃねーぞ！」

「ば、僕は関係ないじゃないですか！」

「をほほほほ！ お黙りむさ苦しい男子め！ くやしかったら美少女に生まれ変わってきなさい！」

そして、アンタ達の進級は私の指先ひとつに掛かってるってことを覚えておくのね！」

リオスの言葉に跳ね起きるように立ち上がり、猛然と舞に向かつて抗議するハヤトとルーク。

しかし舞は2人の抗議など知らぬふりで、胸を張って高笑いを響かせるだけ。本来ならもう少し騒ぎになりそうなのだが、リオスやティアナを始めとした教室にいる訓練生にとつて、毎朝のように行われるハヤトとルーク、そして担当教官である舞のこのやり取りは既に恒例行事。

今更あーだこーだと騒ぐのも馬鹿らしいというものだ。

「ルークがむさ苦しいのは認める！　だが俺はイケメンだろう！」

「ハヤトがむさ苦しいのは認める！　だが俺はイケメンだろう！」

「何で2人とも同時に同じ内容の事を、一字一句違わずに言えるの？　僕はそっちの方に驚きだよ」

「まあどっちも性格が壊滅的だから、どんだけ顔が悪くても意味無いのが悲しいところよね。」

どのみち私はアンタ達くらいの男は嫌いだから、顔が悪くても関係ないけどね。

やっぱ弄るなら女の子がいいわよね。柔らかいし可愛いし……あ、そういう意味じゃリオスは合格だから安心なさい。男にしろくのがもったいない位に可愛いもの！」

「嬉しくないです」

目を爛々と輝かせて、まるで女神のような笑みを浮かべる舞に対

し、リオスは片手を挙げて疲れた声を上げる。とはいえ、これもこの訓練校に入ってから毎日のことだったので、既に諦めが入っているのが涙を誘うところだ。

「差別は駄目でしょ教官！」

「そーだそーだ！ 俺等にはいつでも厳しくせに、なんでリオスには妙に優しいんだよ！」

「女の子>リオス>>>>（越えられない壁）>>>>あんた達」

「「すいませんでした……」」

「わかればよろしい」

きつぱりと言い放つ舞に、ハヤトとルークが膝から崩れ落ちる。これもまた、このクラスでは余りにも見慣れた光景であった。…うん、まあこれを見慣れるのもどうなんだという気持ちは大いにあるのだけど、見慣れた光景なのだから仕方ない。

「左教官は、あいも変わらず面白い人じゃなあ」

「アレを面白いで片付けていいわけ？」

「そういう事しておいた方が、わらわ達の精神衛生にとって健全じゃろ？」

「まあ……そりゃ、そうよね」

その光景を見ながらニヤリと笑うゆずを横目に、ティアナはやれやれと頷いた。

見ている分には面白いが、あそこに自分から突っ込んでいこうと思えるほど、ティアナは冒険心を持った若者ではない。むしろ危険からは遠ざかるべきだと考える人間だ。

わざわざトラブルに関わろうと思わないのは当然だろう。

「ま、いざとなった誰かが止めるでしょ」

「そうじゃな。わらわ達は、ここでこうして高みの見物といこうかや」

ただ、ゆずとティアナの隣で自分の席に座っているスバルだけは、心配そうな顔をする。

それはお約束となりつつあるこの後の展開について、彼女なりに心配しているからだろう。

「うーん、本当に止めなくていいの？」

多分、舞さんとハヤト達、また校長センセに怒られちゃうよ?」

「じゃあアンタが止めにいつてきなさいよ、スバル」

「そうじゃな。少なくともわらは教官に絡まれるのは御免じやもの」

「う……そ、そりゃあ、あたしだって嫌だけどさあ」

けれどゆずとティアナの声を受け、スバルは口を尖らせて言葉に詰まる。

心配は心配だが、馬鹿騒ぎに絡んだせいで朝から酷い目にあうのは勘弁願いたいらしい。

正しく懸命な判断だと言えるだろう。

「あの騒ぎはいつものことなんじゃし、放っておくのがよかる。わらわ達に出来るのは、こうして騒ぎを眺めながらのんびりしておくことなのじゃ」

「そ、そうかなあ」

「当然じゃろ。そも、アレはじゃれておるようなものじゃよ。左教官がその気になったなら、ハヤト達なんぞ一発で気絶させられとるしの。何せ格闘戦においては、主よりも遥かに強いんじゃし」

「確かに、それはそうなんだけどさ」

「心配せんでも、怒られるのも含めていつも通りということじゃ。そんなにやきもきせずに、この光景を楽しむくらいの余裕を見せんといかんのじゃ」

「……」

「それに——む？　どうかしたかの？」

ぽやんとした微笑を浮かべるゆずだったが、自分の方をまじまじと見つめるスバルの視線に、言葉を途中で止めて怪訝な顔で首を傾げ、スバルに向かってそう問いかけた。

問いかけられたスバルは「んー」と小さく唸ってから、感心したように呟く。

「やっぱりゆずって落ち着いてるよね。なんかおばあちゃんみたい」

「おば……っ!？」

「ばっ！ 何言ってるのよ馬鹿スバル!！」

「もがっ」

不穏な発言をしたスバルの口をティアナが慌てて塞ぐ。

ただ、スバルはもう『その単語』を口にしてしまった後なので、既に手遅れではあったが。

「お、おばあちゃん……わらわがおばあちゃんじゃと……?」

「この馬鹿！ そう言われるのをゆずが気にしてるって知ってるでしょ!？」

「あわわ、そういえばそうだった! ど、どうしようティア!？」

「ふ、ふふふ……まだ16年しか生きておらんというに、まさかおばあちゃん扱いされるとはの。」

さすがのわらわも吃驚仰天じゃよ。まさに青天の霹靂というヤツじゃ」

ゆずは椅子に座ったまま俯き、プルプルと肩を震わせてぶつぶつと呪詛のように何事かを呟いている。

おばあちゃん呼ばわりされたのが、余程ショックだったのだろう。まあ、普通女の子なら誰でもおばあちゃん呼ばわりされればショックだけでも。

ただ、ゆずは殊更「おばあちゃん」呼ばわりされるのを嫌がつており、それはこのクラスの人間なら誰でも知っていることなのだ。それはもちろんスバルも知っている……筈のだが、彼女は時々こうしてそれを忘れ、うっかり彼女をおばあちゃんっぽいと言ってしまう事があるのだ。それこそ今回のように。

「吃驚仰天とか、そういう言い回しもおばあちゃんっぽいよね」

「なん……じゃと……!？」

「だから何でアンタはそういう不穏当な発言をするのよ、この天然馬鹿!」

「ひゃあ!? し、しまった! つい口が!」

注意されたばかりなのに、更にうっかり発言を重ねるスバル。

ティアナに思い切り頭を引っ叩かれるが、もうどう頑張っても時既に遅し……というかぶつちぎって遅すぎるというか、何というか。

「う、うう……」

「だ、大丈夫よゆず！ ちょっと単語の選び方が古くさ……新しくないだけで！」

「そうそう！ 物腰とか喋り方が年寄りくさ……大人っぽいだけだから！」

ぶるぶると肩を震わせるゆずの目に、涙が溜まっていく。

ティアナとスバルは何とか慰めようとするものの、慌てているせいか結局傷口に粗塩とからしを塗りこむような単語しか選べていない。やめて！ もうゆずのライフはとくにゼロよ！！

そして――

「わらわは……わらわは……っ！ まだピッチピチの16歳じゃもん……っつー！！」

「あ、ゆず。ピチピチっていうの、もう死語だよ」

「あんたはもう喋るな！」

「うわ………んっー！！」

——ガタンツ！ と席を立って涙目のまま教室の外へと駆け出していくゆず。

その背中にスバルがまたまたうつかり発言を投げかけ、ゆずは走る速度を一気にトップギアに入れ、目にも留まらぬスピードで廊下を駆け抜けていってしまふのだった。

「ゆ、ゆずーっ！」

「ごめんゆず！ 謝るから戻ってきてーっ！」

ゆずが走り去った廊下に、ティアナとスバルの声だけが空しく響き渡る。

ティアナとスバルが慌てて廊下に顔を出したが、そこにゆずの姿はもう無かった。

一方その頃のハヤト達と言えば。

「さあどうするのかしら！？ 私に内申という切り札を握られてい
る以上、アンタ達に逆転する要素は無いわよ！ さっさと降参して、
私の視界に入らない教室の隅でガタガタ震えてなさい！」

「……ごちゃごちゃうつせー。ンなこたもうどうだっていいんだよ」

「あら？ 諦めたのかしら？」

「いいぜ……教官が俺達の内申を思い通りに出来るってんなら」

「まずはその幻想をぶち殺す!!」

「いや、ハヤトもルークもそんな権限ないよね？」

そげぶごっこで遊んでいました。

この後、舞とハヤト、ルーク、リオスの4人は漏れなく校長からのありがたいお説教をいただき、ゆずは訓練校を一周してからすつきりした顔で戻ってきたとき。めでたしめでたし。

さて、ここまで読んだ諸君に、は第4陸士訓練校の評判が思わしくない理由を理解して頂けたと思う。

優秀な人材を輩出し、教官に歴戦の管理局員を向かえ、レベルの高い人間が揃っているというのに、第4陸士訓練校が管理局内であり評判がよろしくない理由。

それは――。

――総じて、そこに関わる人間のキャラが濃いせいである。どっとはらい。

・今回のおまけ

『ハヤトとリオス』

ハ「……なあ」

リ「何？」

ハ「巨乳の定義って、やっぱりDカップから——」

リ「いいから反省文書きなよ」

『リオスとルーク』

ル「なあ、リオス」

リ「何？」

ル「黒縁眼鏡と三つ編みをした真面目っ子がガーターベルト着用っ

て、かなりエロくね？」

り「だから反省文書きなつて」

『舞とゆず』

舞「ねえ、ゆずちゃん」

ゆ「なんですか、教官？」

舞「私ってね、ポニテ萌えなんだ。だから――」

ゆ「仕事してください」

第1話 『朝8時だよ！ 全員集合！』（後書き）

初めましての方は初めまして。

私の作品を読んでくださった事がある人は、また読んでくださりありがとうございます。

どうも、ラモンです。

そんなこんなで、いよいよ始まっちゃいました。

今まで他作者さんのキャラを、しかもこんなに大勢動かした経験がないので、凄くドキドキしながら書かせてもらいました。

結構色々やらかしちゃった気もしますが、大丈夫だったんでしょ（汗）

今回登場したキャラクターの作者さん、問題があつたらメッセージなどで教えてくださいませ。修正させていただきますので。

ともあれ、これからこんな感じで『陸士訓練学校のドタバタな日常』は続いていく……筈です。

果たして私はどこまで頑張れるのでしょうか。

出来る範囲で、全力で頑張っていきたいと思います。

ちなみに『今回のおまけ』ですが、これは今まで登場したキャラクターが4コマみたいな感じで喋りあうものです。

ネタが思い浮かぶ限り毎話やるつもりですので、こちらも楽しみに。

それではまた、次の話で。

第2話 『彼等は基本的にノリで生きています』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

「……」

「……」

早朝、まだ太陽が顔を覗かせたばかりの第4陸士訓練校宿舎。

口の字型になっている宿舎の中庭で、3人の少年が向かい合って立っていた。

うち2人はジャージ姿のハヤトとルーク。そしたもう1人は、同じくジャージ姿の、茶色の髪を肩まで伸ばした、青緑の瞳が印象的な少年——ユウキ・エレンリッドだ。

「いくぜ、ユウキ？」

「ああ。ルークも準備はいいか？」

「モチのロンよ」

3人はお互いの顔を見てから、不敵な笑みを浮かべた。
そして――

「おっぱい体操〜〜！ 第一〜〜〜〜！！！」

「まずは腕を上下させておっぱいを賛美する運動から！」

「さんはい！！！」

「「「（。。。）〇ミ。おっぱい！おっぱい！」「「

3人は腕を思い切り上下させ、宿舎中に響き渡る程の大声で掛け声を上げる。

おっぱいおっぱいと叫ぶ彼等の額には汗が光り、その表情にはやり遂げたかのような表情が浮かんでいる。そして、それを数十分繰り返していただろうか。

一応の終わりを見たようで、彼等は腕を振るのをやめて次の動作を大声で叫ぶ。

「次はー全身を回しておっぱいを崇める運動ー！」

「さんはい!!」

「○○(㇏≡、㇏)○ おっばい!おっばい!」「」

続いて3人は上半身をぐるぐる回しながら、再びおっばいおっばいと大声で叫ぶ。

そりやもう宿舎中どころか、近隣一帯に響き渡るような大声で。現在の時刻は早朝の4時を少しだけ回ったあたり。早朝訓練などがあり、比較的早い起床時間を決められている訓練校でも、極めて早すぎる時間である。

普通に考えればやらないし、仮にやったとしても、もう少し自重するものだ。

けれど、3人は自重しない………どころの騒ぎではなく、より一層声を張り上げていく。

「続いてー上下に飛び跳ねておっばいに感謝する運動〜!!」

「「「おっばい! おっばい!」」」

「さらに反復横跳びをしながら、おっばいへの敬意を示す運動〜!!」

「「「おっばーい! おっばーい!」」」

「更に更に、シャドーボクシングをしながら、おっばいの素晴らしさに感動する運動〜!!」

「おーっばい！ おーっばい！」

「ほいでもって、エアギターと共におっぱい賛歌を奏でる運動〜」

「おっぱいばーい」
「おっぱいばーい」

当然ながら、早朝からそんなに騒がれて平気な人間など居ない。しかも大半の訓練生は、前日の訓練や座学の疲れなどで朝は一秒でも多く情眠を貪っていたいのだ。

つまり、そんな朝に騒ぐ彼等に待っている物。それは。

「「「「「うるせー……っっっ！……！……！……」」」」」

「ちーっ!?!」

宿舎中の窓という窓から降り注ぐ、魔力弾の雨だった。

この物語は、第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

誰がなんと言おうとそうなのである。
そ、そうなんだったら！ やめて！ そんな疑わしい目で見ないで！！

●陸士訓練学校のドタバタな日常
第2話 『彼等は基本的にノリで生きています』

朝の騒ぎから数十分後。
ハヤト、ルーク、ユウキの3人は宿舎で最も広い待合所に居た。
だが、その場に居るのは彼等だけではなく、他にも数多くの人間が顔を連ねていたりする。

「じゃあ朝練まで時間も無いし、とっとと裁判を始めろぞ。
被告人ハヤト、ルーク、ユウキは前へ」

やや跳ねた茶色の髪を持った少年が、その鋭い金色の瞳で3人を見据え、待合所でもっとも大きなソファに座ってそう促す。
どうやらここを簡易的な裁判所に見立てているようだ。
それに伴い、ざわざわと俄かに辺りが騒がしくなる。

「裁判長はコイツらと同じクラスのクラス委員である俺、氷上京谷が務めさせて貰う。」

問題が無ければ始めたいが、何か言う事がある奴はいるか？」

あたりを見回して確認する京谷の問いに、周りからの野次馬からは「異議なーし！」「さつさとやれー！」という声が返ってくる。どうやら宿舎にいる殆どの人間が集まっているようだ。なんだかんだで皆暇人らしい。

「では、今回の事件の経過を私、アウルⅡアパレシオンから説明させていただきます」

そんな中、私服姿の多い野次馬の中から既に訓練生の制服に着替えた少年が歩み出る。

雪のように白いミドルロングの髪を首の後ろで括り、髪色とは真逆の黒い瞳を持ったその少年——アウルは、どこからか持ってきたファイルを片手に語り出す。

「事件が起きたのはつい先ほど。まだ朝の4時を過ぎたばかりの早朝に起きました。」

彼等は……詳しいところは冒頭の部分を読んでくださいね」

「おい、メタんな」

「失礼。それでは事情を説明させていただきます。」

かくかくしかじか、以上がこの『早朝睡眠妨害事件』の全容になりますね。

我々の睡眠時間はあまりにも突然に、そして無慈悲に奪われました。しかも彼等が奪ったのは、ただの睡眠時間ではありません。

昨日の訓練で疲れ果てた私達にとって、1分1秒でも長く貪っていた朝の睡眠を奪ったのです。

これは私が生きてきた中でも、類を見ない程の凶悪な事件ですよ」

アウルは目頭を押さえ、沈痛な面持ちで首を横に振る。

そんな彼の言葉にあちこちらから「そうだそうだー！」とか「ぶっ殺せー！」という声が上がった。

「待ってくれ！俺達に悪意は無かったんだ！」

「そうだそうだ！ちょっとおっぱいについての情熱が溢れただけなんだ！」

「おっぱいに罪はない！つまり俺達にも罪は無い！」

「しかも本人達に反省の色は無い。実に嘆かわしいことです」

頭痛を堪えるような仕草をするアウルに、野次馬達からは同情の声が聞こえてくる。

中々に堂の入った検事役である。本当の法廷でも戦えるのではないだろうか。

「ハヤト君、ルーク君、ユウキ君。もう少し反省したらどうかかな？
君達が騒ぐのはいつもの事としても、もう少し時間を考えるとか
……というかりオス君は？」

「あ、リオスなら昨日胃痛で倒れてまだ帰ってきてないぜ」

「何かマリーナ教官の話だと、ストレス性の急性胃潰瘍とかなんとか」

「おいおいハヤトにルーク。お前らどんだけ迷惑かけてんだよー」

「いや、そんなにかけてねーって」

「だよなあ。昨日だって、大したことしてねーって。ちょっとアイツの部屋にエロ本を隠そうとして、それを左教官に見つかって3人揃って怒られただけだし」

いつもならば、こうなる前に止めている筈のリオス「コーネルドの不在に気付いたアウルが尋ねてみれば、返ってきた答えは予想の斜め上……むしろ空の彼方なものだった。

悪びれもしないハヤト達に、アウルは呆氣に取られ、京谷は「おいおい」と頭を抱えた。

それ以上に、いくらリオスが女装が似合う人間だからといって、彼に女装させて心を癒すというのはどういうことなのか。虚しすぎるだろう、常識で考えて。

「何だ、いつも通りじゃん」

「「だろー?」」

「……検察側としましては。彼等に極刑を望みます」

「「「何で?!?」」」

反省の欠片もないハヤト達に辟易しつつ、アウルは溜息と共に結論を出した。

もちろんハヤト達がそれに納得する訳もなく、3人は思い切り立ち上がって抗議の声を上げる。

「ただ朝の体操をすることも出来ないなんて! この国はどうなっているんだ!」

「そうだ! 俺達には自由に生きる権利がある!」

「おっばいは正義!」

「黙れ」

「「「はい」」」

しかし、そんな3人の抗議は京谷のひと睨みで掻き消されてしまふ。

こうやってハヤト達を黙らせる事が出来るあたり、クセの強いハヤト達のクラスを纏めているのは伊達ではないという所だろう。

「では次に被害者達の声聞いてみようじゃないか。被害者代表、前へ出てもらえるか」

やれやれと溜息を吐く京谷に促され、2人の少女が前に出る。

1人は薄いブラウンの髪を肩の辺りで揃えた、勝気な印象を受ける少女。

そしてもう1人は、腰まで届く藍色の髪が特徴的な、悪戯好きな猫のような印象の少女だ。

「2人とも、名前を言ってもらえるか？」

「ミコト〓タツナミよ」

「草薙くさなぎ 蒼そうだ」

「知ってる。クラスメイトだからな」

「じゃあ聞くな！」

ぶっきらぼうに言い放つ京谷に、揃ってツツコミを入れるミコト達。

それから一度仕切りなおすように咳払いをしてから、2人はそれぞれ口を開く。

「被害者としてはふざけんなって話よね。

こっちは昨日、左教官にしごかれたせいで疲れてたっていうのに、
ねえ京谷、裁判とかいいから私達に任せない？ 私の電撃で一発
よ、こんなの」

「むしろ被害者全員に一発ずつ殴らせろ。私達はその権利を十二分に有している筈だ。

何、手間は取らせん。ものの数秒でカタがつく」

喋りながらポキポキ指を鳴らすミコトと蒼。

ハヤト達はそれを見て体を震わせながら思い切り後ずさって悲鳴を上げる。

「ま、まで！ 落ち着いて話し合おう！」

「そうだ！ 俺達には言葉があるじゃないか！」

「それに本気で悪気は無かったんだよ！ ちょっと徹夜でゲームしてて、テンションおかしくなってる衝動的にああいう事をやってしまっただけで！」

「へえ。じゃあアンタ達は、衝動的に私達の睡眠を妨害したわけね？
どーにもアンタ達、3人揃ってサンス・リバーを渡ってみたいらしいわねえ……」

「「「はうあ！？」」」

何とか自分達を擁護しようとして、わざわざ地雷を踏み抜く3人。
ここまで見事だと、

もはやワザとやっているんじゃないか、と思ってしまう程だ。

まあ、実際にはただ単純に必死すぎて自分達が何を言っているのか分かっていないだけなのだろうが。

「蒼、やるわよ」

「いいだろう、たまには本気でいくとしよう」

「「「ちよつとおおお!?!」」」

ミコトが自分の周りにバチバチと火花を散らし、蒼はそれぞれ拳を固めて目にも留まらぬスピードで、空気を切ってシャドーボクシングを開始する。

どう見ても殺る気マンマンです。本当にありがとうございました。
野次馬達もそんな彼女たちに触発され、それぞれが拳を固めているようだ。

「まあ落ち着け。まだ判決は出ていないぞ」

「……ちっ」

「命拾いしたな。オマエ達」

しかし彼女達が手を出すよりも先に、京谷が手で制してそれを止

めた。

「被害者達の気持ちは痛いほどよくわかった。
では、今度は被告の弁護人に登場して貰うとしよう。弁護人、入
ってくれ」

「どうも、被告人達の弁護人を務めるアルトリアームーンライトで
す。

本日はよろしく願いしますね」

次に野次馬の中から歩み出たのは、少女と見紛う外見をしたやや
小柄な少年、アルトリア。

彼もまたアウルと同じく訓練校の制服に身を包み、長い金色のポ
ニーテールを揺らしながら地面に正座させられたハヤト達の前に出
る。

「えっと、ハヤト達は日頃からこういった迷惑行為を繰り返してた
みたいだよ？

こんな風に怒られるのも、1回や2回じゃなかったみたいだね」

「ふむ」

「ちなみに4日前の朝にも今日と同じ事をして怒られてるね」

「つまりは再犯、という事か」

「うん。そういうことになるかな。」

けど実際、悪気自体はないみたいだし、多少情状酌量の余地はあるかな。

掛け声の五月蠅さとか、叫んでる声の大きさとかはともかく、やってることは一応体操だしね。

その辺りも踏まえて、弁護側としては……」

アルトリアはそこで一度言葉を区切り、それから正座した3人を一度だけチラツと見つめてから、一度咳払いをして結論を述べた。

「特に弁護する価値を見出せませんので、死刑でいいと思います」

「「「おいイイイイ！！ 弁護しろよおおお！！」」」

「ぶっちゃけるとね、正直勢いで弁護人役をやったの後悔してるんだ」

「「「自分で言い出しておいて！？」」」

「安眠妨害は死刑っていうのが、ウチの家訓なんだよね。だから死刑でいいと思います」

「「「何で2回言ったし！！」」」

可愛らしく首を傾げて、ちよろつと舌を出しながら告げるアルトリア。

もちろん嘘だが、今この場にハヤト達のツッコミに同調する人間は居ない。誰だって、朝っぱらから馬鹿騒ぎをされて安眠妨害をさ

れば、文句のひとつどころか殺意だつて覚えるだろう。

仮に前日の訓練がなければギリギリ許して貰えたかも知れないが、現実是非情だ。

「よかるう。ではそろそろ朝練の時間も迫ってきたから判決といこう。」

検察側、弁護側、そして被害者側。その全員からの証言を纏めた結果……」

「異議あり！ 明らかに俺等が有利になる証言が無かった！」

「弁護人も弁護してなかったし！」

「この裁判は違法だ！ 正義が無い！！」

「異議は却下だ。裁判長役にも飽きてきたしな」

「『ええ』……」

身も蓋も無くハヤト達の抗議を一刀両断する京谷。

まあ実際この裁判（笑）が始まってから既に30分近く。飽きてきても仕方ないのかも知れない。

「……うん。やっぱり飽きてきたな。ミコト、蒼、後は頼んだ」

「りょーかい」

「いいだろう。任せておけ」

「結果は後で教えてくれ。俺は部屋に戻って授業の準備をしてくる」

どうやら本気で飽きていたらしく、京谷はひらひらと手を振ってソファから立ち上がってどこかに行ってしまう。立ち去る時の彼の指示に従い、ミコトと蒼の2人が裁判長席であるソファに腰掛けた。ただ、いくら大きいとはいえ1人掛けのソファに2人で座るのは、流石に細身の2人でも狭いようでありぎゅうぎゅう詰めだったりする。

「ちよっ、狭いわよ蒼！ アンタちよっと立ちなさい！」

「ふざけるな尻でか女。お前が立つべきだ」

「誰のお尻がデカイですってえ！？」

「ふん、お前に決まっているだろう？」

余分な贅肉が胸ではなく尻に溜まっているのではないのか？」

「なななな……！？ だ、誰が貧乳よ！ アンタだって変わんないでしょ、この貧乳オブ貧乳！」

「よしいい度胸だ表に出ろド貧乳め」

席の狭さを発端として、お互いの胸を貶しながら怒鳴りあうミコトと蒼の2人。

ぶつちやけ傍目からはどちらも変わらないのだが、本人達は「自分の方が大きい」という自覚があるらしい。……どっちもAカップ未満なのにな。

「前々からアンタの態度は気に食わなかったのよ！」

今日こそ、私の方が大きいって事を、その貧しい胸に教えてあげるわ！」

「おかしな事を言うな超ド貧乳。私の方が大きいに決まっているだろうが」

「なによ！」

「なんだ？」

被告席に居るハヤト達をそっちのけで、2人はヒートアップしていく。

そのせいでグダグダになっていく空気を感じ、野次馬達も1人また1人と立ち去っていった。

実際のところ、全員そろそろ飽きてきていたのだろう。朝練の近いことも、原因ではあるけれど。

「あー、またグダグダになっちゃいましたね。どうしょっか？ アウル」

「うーん……仕方ない。私達で判決を下してしまうとしましょうか。ああ、ハヤトさん、ルークさん、ユウキさん。逃げようなんて思

わないでくださいね？

逃がしませんから」

「「ぎくっ！」「」

「許さないよ、絶対にだ」

騒ぎに乗じてこっそり逃げ出そうとしていたハヤト達の首根っこを掴み、アウルとアルトリアの2人がにつこりと笑う。

ハヤト達はこの時、2人の浮かべた朗らかな笑みが、死神の笑みに見えたと後に語った。

アウルとアルトリア。普段は温厚だが、怒ると怖い2人である。

「さて、判決はどうしましょうか」

「そうだな……あ、アウル。丁度いいのがあるよ」

「丁度いいもの？」

「あれあれ」

アルトリアの指差す方を見れば、そこには臨戦態勢のミコトと蒼の姿があった。

ミコトは全身に雷を纏い、バチバチと火花を散らす。

対する蒼はゆっくりと腰を落とし、すぐにでも飛びかけられるような体勢を取っている。

まさに一触即発。2人の間の空気が、ビリビリと震える程の殺気

まで感じる程だ。

そんな2人を見て、アウルは「なるほど」と頷く。

どうやら、アルトリアが言わんとしている事に思い至ったらしい。

「ハヤトさん、ルークさん、ユウキさん」

「時間もそろそろアレだし、判決を言うね」

「「「……ごくり」」」

アウルとアルトリアはゆつくりと3人を振り返り、まず見た者全てを魅了する笑みを浮かべた。

次に彼等は、口を揃えて判決を言い放つ。無慈悲に、無感情に。

「ミコトさんと蒼さんの喧嘩を止めてください」

「ただし、2人を怒らせてからね」

「「「oh...」」」

「ちなみに従わなかった場合は、左教官に怒ってもらうからね」

「では、私達はそろそろ授業の用意をしなくてはいけないので、部屋に戻らせて頂きます。

頑張ってくださいね」

最後にそう言いながら手を振って、自分達の部屋に戻っていく2人。

呆然と彼等を見送ってから、3人は恐る恐る言い争っていたミコトと蒼を見た。

「最初っからフルパワーでいくわよ。消し炭になっても恨まないでよね」

「そっちこそ、私の一撃で骨が折れないように気をつけるんだな」

ミコトも蒼も、既に周りなど見えていないらしい。

その表情に浮かぶのは明らかな殺意だ。よほど貧乳を気にしている見える。

本当なら、3人は逃げ出したかった。

クラスメイトなのだから、ああなった2人が危険すぎるのは百も承知している。

しかもアルトリアの指示は、更にあそこから怒らせた拳句に喧嘩を止めなければいけない。そんな事が不可能だということは明白すぎる事。

けれど、2人を止めなければ、彼等にとって天敵とも言える左舞教官がやってくるのだ。

いくら嫌でもやらなければならない……世の中、こんな筈じゃなかった事ばかりだよ。

「怒らせる役は俺がやる。お前達は逃げる準備だけをしておけ」

「へっ……馬鹿野郎。ハヤト1人にいいカッコさせるかよ！」

「そうだが、旅は道連れ世は情け。俺たちも一緒にやるぜ！」

「お前ら……全く、幼馴染のルークはともかく、ユウキも大概だな」

「はっはっは！」

悲壮な決意を固めながら、お互いの肩を叩いてひとしきり笑いあ
う。

そして3人は顔を見合わせてひとつ頷くと、大きく息を吸ってそ
れぞれに叫んだ。

「ミコトのどひんにゅー！」

「蒼の胸はえぐれ胸ー！」

「お前ら揃って豊胸パッドでも使ってなー！」

「なああんだとおおおー！！！！？」

「ひいっ！？」「ひいっ！」

ハヤト達の子供じみた中傷に、ミコトと蒼は修羅の如き表情で振
り返る。

その顔を見た瞬間、ハヤト達は反射的に駆け出していた。

——振り返ったら、足を止めたら、その瞬間に狩り取られる。

人としての……いや、生物としての本能がそう叫んでいるからだ。けれど、悲しいかな。追う側と追われる側で、今回はあまりにも差がありすぎた。

——魔導師としてのではない。

——生物としての性能でもない。

“生き延びたい”という想いと、“狩る”という絶対の意思。そこに、どうしようも無い程の差があったのだ。

「や、やめて、許して……！」

「ぷるぷる……やめて！ ボク悪いルークじゃないよ！」

「こんなの絶対おかし……せめて最後まで言わせてください!!」

「知ったことかあああああ！！！！」

「「「ぎゃあああああ！」」」

彼等が逃げ出してから数秒後。

宿舎に、狩られた者達の悲鳴が響き渡った。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

……そうだと、いいな。

・今回のおまけ

『京谷とユウキ』

ユ「なあ、京谷」

京「ん？　なんだ？」

ユ「俺が頭良くなったらモテると思うか？」

京「不可能な夢を見るな」

『アルトリアとミコト』

ミ「ねえ、アリア」

ア「どしたの、ミコト？」

ミ「何をしたら、胸って大きくなるかな？」

ア「何で俺に聞くの？俺男だよ？」

『蒼とアウル』

蒼「アウル、少しいいか？」

アウ「何でしょう？」

蒼「さっき雑誌で、男と（自主規制）をすると胸が大きくなると書いてあった。

だから手伝え。今すぐにだ」

アウ「全力でお断りします」

第2話 『彼等は基本的にノリで生きています』（後書き）

キャラ崩壊ってレベルじゃねーぞ！
どうも、ラモンです。

だ、大丈夫かな今回…… 大分キャラ崩壊しちゃってる人たちが居るような…… 怒られたら即行で直そう。
そんな感じの第2話でした。

やっぱり人が多いと難しいですね。
しかもまだ紹介していないキャラクターを登場させているので、紹介とあわせると中々どうして難しい……。

今回は京谷さん、アルトリア君、アウルさんあたりが酷いキャラ崩壊をしちゃってる気がしますし。

ノリで書いていると、こういう時に困りますね。

ちなみに、クラスメイト枠の皆さん…… 特に男子は結構な勢いで3馬鹿枠みたいな動きをしてもらう場合があります。

基本的に3馬鹿は固定ですが、今回みたいに誰かが3馬鹿枠に巻き込まれる場合もございますのでご注意ください。大概酷い目にあります。

とりあえず今回で3馬鹿、クラスメイト枠の皆さんは殆ど出演させる事が出来ました。

次回からは上級生枠、生徒会枠、クラス委員（女）枠、女子クラスメイト枠の最後の1人、そして教員枠の皆さんをメインに据えたいと思っています。

どうなるか分かりませんが、頑張りますので怒らないで見てくださいます。

それではまた、次の話で。

自分のキャラの扱いに納得いかない場合、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。出来る限り修正します。

第3話 『生徒会役員共と、巻き込まれた少女達』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

陸士訓練校は、当たり前ながら陸戦魔導師を始めとした数々の魔導師を教育する機関だ。

しかしその反面、普通の学校としての側面も持っている。

その最たる例として挙げられるのは、生徒会がある事だろう。

生徒会のメンバーは、役職ごとに立候補した中から選挙で選ばれる。

とはいえ、生徒会と言えば「面倒ごとを押し付けられる」というイメージを持つ人間が多いため、実際は立候補すれば間違いなく当選という状況ではあるのだが。

そんな現状もあって、生徒会のメンバーは現在僅か4名。
しかもその全員が、中々に濃い面子になってしまっているのだ。

「ねえ、ハヤブサ」

「あん？」

その生徒会のメンバーである2人の少年、リョウガ「ヤマトとハヤブサ」ヴェヌーシアは、それぞれ自分用に宛がわれた机の前でパソコンに向かっていた。

「さっきから仕事が全然進んでないみたいだけど、何やってるの？」

青緑色の目でパソコンの向こうから反対側の席に座る人間を睨みつけるのは、リョウガ「ヤマト」。

若干10歳でありながら、飛び級でこの訓練校の最上級生として通い、生徒会では会計を任されている天才児だ。可愛い顔つきもあって、特に女子の訓練生からの評判がよく、この第4訓練校ではそこそこの有名人だったりする。

「あー？ ゲームやってる」

そんなリョウガの鋭い視線を受けつつ、平然とパソコンの画面を見つめているのがハヤブサ「ヴェヌーシア」。赤いウニのような髪形

が特徴的な17歳男子。

ハヤト達の上級生に当たる訓練生で、一応生徒会の書記を担当している。

「ねえハヤブサ。僕は必死になって君の倍以上はある書類をやつてるのに、まさか君はこともあろうに生徒会室でエロゲをやつてるの？ 何なの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

「はあ？ いい加減リトバスをエロゲと勘違いしてる奴うぜえ。エロゲじゃないし。T O L O V Eとかの方がよっぽどエロゲ」

「エロゲじゃなかったら何なのさ」

「筋肉……かな？」

「うわぁ……」

パソコンの画面から窓の外へと視線を移し、遠い目でそう呟くハヤブサに、リョウガは本気でドン引きした。まあ、実際リョウガでなかったとしてもドン引きしただろうが。

ちなみにF a t eは文学、A i rは芸術、クラナドは人生だ。

「って、そんな恒例のやり取りは置いといて。仕事は終わったの？ 何か見た限りだと、全然進んでないように見えるんだけど」

「は？ 仕事とか超面倒くせえし。そんな事より野球しようぜ！ 俺達のチーム名は『ハヤブサバスターズ』な」

「仕事しないならへし折るよ？」

「どこを！？ つーか何で俺の股間をガン見なんでせうか！？ ちよつ、やめてえっ！！」

不穏な箇所を見ながら手をボキボキと鳴らされ、ハヤブサは慌てて自分の股間を押さえ、椅子ごと飛び上がって後ろに下がる。男の勲章をへし折られたらフラグも立てられないからね！

「はあ……別に仕事しないならそれでもいいけどさ。怒られるの僕じゃないし」

「えー。もう少し構ってくれよりヨウガ、俺達友達だろ？」

「10歳の子供に構ってくれって頼む17歳ってどうなの？」

「こまけえこたぁいいんだよ！」

「細かいじゃないじゃん」

ハヤブサの言葉に、リョウガは呆れた声で返しながら再び手を動かした。

実に手馴れた対応である。まあ、なんだかんだと殆ど毎日ハヤブサの相手をしているのだから、嫌でもリョウガにも耐性がつくというモノだろう。

本人に聞いたたら、「こんな耐性欲しくないんだけど」と言うのは

目に見えているが。

「っと、そういや今日会長と副会長は？」

そこでふと気付いたとばかりに、ハヤブサが尋ねる。

ハヤブサの問いに対して、リョウガは今日何度目になるか分からない溜息を、これ見よがしに深々と吐いてみせてから渋々という感じで答えを返す。

「はあああああ……………会長と副会長は、学内の治安維持の為に回り中だよ。」

昨日さんざん言われたじゃない。聞いて…………無かったんだろっけどさ、ハヤブサは「

「ふっ、そんなに誉めないでくれたまへ。照れるじゃないか」

「誉めてない。まったく微塵も欠片も小指の先ほどすら誉めてないから」

「またまた、リョウガちゃんてば照・れ・屋・さ・ん」

ウザいスマイルを浮かべ、反対側の席まで手を伸ばしてリョウガの額を軽くつつくハヤブサ。

…………それはそれは、見るもの全てがイラッとする程、見事なモノであったと言う。

もちろん、それにイラッとしたのはリョウガも例外では無く。

「ねえ、ハヤブサ？」

「はいはい、なんでせうか？」

「全力攻撃と、全身全霊攻撃、どっちがいい？」

「……それ、どういう違いがあるんだ？ 説明願いたい」

「簡単に言つと、Die or Death」

「どっちも死んでるじゃん！？」

「大正解。じゃあ……死のうか」

後光が差してきそうな神々しい笑みを浮かべてリョウガがそう言
った次の瞬間、生徒会室から灰色の光が溢れ、次いで凄まじい爆発
音が轟いた。

第4 陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えてい
る。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語……の筈である。

多分、きっと、おそらく。

● 陸士訓練学校のドタバタな日常

第3話 『生徒会役員共と、巻き込まれた少女達』

「ごめんねー、美卯。私の用事に付き合わせちゃって」

「いいよ別に。友達が困ってたなら、手伝ってあげたいもの」

リョウガとハヤブサの2人が生徒会室で生死を賭けた戦いを繰り広げている頃。

訓練校から宿舎へと続く道を、2名の少女が歩いていた。

「にしし、優しいにゃ〜。だから美卯ってば大好き！」

そう言っただけに笑うのは、背中まである深緑色のポニーテールを揺らす活発そうな少女、ソフィア。ジュリーストン。ハヤト達のクラスメイトであり、クラス委員でもある女の子だ。

ちなみに、低めの身長には不釣り合いな、たわわなおっぱいの持ち主でもある。

……え？　そういう情報知らない？　またまた、遠慮しないでいってば。

「もー、ソフィアはすぐそうやって誤魔化すんだから」

ソフィアの人懐っこい笑みに苦笑して、彼女の額を軽く小突くのは山城美卯。

彼女よりも短く、肩よりも少し上までしかないこげ茶色のポニーテールが特徴的な女の子で、ハヤト達のクラスメイトでもある。

「そういえば、ソフィアは今日この後どうするの？」

「んー？　宿舎に帰って、スバルとゆずの3人でゲーム大会でも、って感じかな？」

「またそんな不健康な……」

「だってー、あと数日後にはクラスのゲーマー全員対抗モンハン大会があるんだもん。」

今のうちから頑張って、いい装備整えておかないとね！」

「ああ、そういえばそんなのあったね。」

あれって結局誰が主催して……って、そんなのハヤトしかないよね」

「ううん？ 左教官だよ？」

「oh...」

衝撃の真実に思わず言葉を失う美卯であつた。

まさか、ゲーム大会を自分達の担当教官が主催しているとは夢にも思つまい。

むしろ十分に予想していたからこそその反応かも知れないが。

「今のところ、ハヤトとルーク、リオスの幼馴染組が優勝候補なんだよね。

だから、私もスバルとゆずの2人と力を合わせて、あの3人をぎやふんと言わせてやるのさ！

ふははははー！」

「……なんかそれ、先月も聞いた気がする」

「……だってあの3人強すぎなんだもん」

冷静にツッコまれ、ソフィアはしょぼーんと肩を落とす。

実はこの【クラスのゲーマー全員対抗モンハン大会】は毎月行われており、今のところハヤト・ルーク・リオスの幼馴染チームが3連覇中である。

「でも、ソフィアは先月ので2位だったじゃない？ 1位じゃないと駄目なの？」

「そりゃそうだよ。だって、1位になったら左教官からジューズ奢ってもらえるし」

「うわ、何とも即物的な……」

嬉しそうに顔を上げるソフィアだったが、美卯は彼女が話す内容を聞いてまた溜息を吐いた。

ちなみにこの1位の景品、ハヤトとルークは1度も奢ってもらった事が無かったりする。

舞曰く、「可愛くない奴に奢るお金は無い！」との事だ。それでも優勝してしまうあたり、ハヤトとルークは意外とMなのかも知れない。いや、単純にゲーム好きなのだろうが。

「先月はあとちょっとまで行ったからねー。今回こそは絶対に勝つよ！」

「無理だと思うけどなあ。リオス君はともかく、ハヤトとルークの2人は、成績……というか生活全般を犠牲にゲームをやっているとこあるし」

「ふふふ、だから私達も今回は成績を犠牲にする覚悟なんだよ！」

「いや、駄目でしょ」

自信たっぷりな顔で胸を張るソフィアにツツコミをいれ、美卯が苦笑する。

まあ本当に成績を犠牲に……とは美卯も思っていない。なにせハヤトとルークがどのくらい成績を犠牲にしているのかといえば、それこそ座学の最中でさえゲームをやるくらいだ。

ソフィアは根が真面目だから、そこまで馬鹿な事は出来ないと知っているのだろう。

「それじゃあ早く帰ろっか。ゆずやスバルも待ってるみたいだし」

「だね。一杯練習して、今度こそハヤト達をぎゃふんって言わせるんだ」

「はいはい、頑張ってね」

そんな風に楽しそうに言葉を交わしながら歩いていた2人だったが、ふと自分達の視界の端に妙なモノを見つけて足を止めた。

「……」

「……」

2人の視線の先——校舎から宿舎へと続く道の脇に植えられている街路樹の側には、コソコソと隠れてあたりの様子を伺っている1人の少年……ハヤブサが居た。

どうやら生徒会室でリョウガから攻撃された後、何とかここまで逃げ延びていたらしい。

それを見つけた美卯は、暫く彼の様子を眺めてから胸のポケットから携帯端末を取り出し――

「あ、警察ですか？ ええ、不審者です。第4陸士訓練学校の側の――」

――おもむろに警察に電話した。

「ちょーっと待った――ーっ!!」

「おっとー!? ここでハヤブサ先輩のちょっと待ったコールだー!!」

「なんでナチュラルに警察に連絡しようとしてるんでせうか!? 酷くない!?」

「ハヤブサ先輩、ご自分の今の姿を見てから言うてください」

「いやそれを言われると何も言い返せませんが!」

通報しようとした美卯に抗議するものの、どうやらハヤブサ自身も自分の格好が、どこからどう見ても不審者だという自覚はあったらしい。

「まあ大丈夫ですよ。本当に通報してる訳じゃないですから」

「え、そうなの？」

「そうですよ。ハヤブサ先輩がそうやってコソコソしてるのって、結構日常茶飯事ですし」

「私達……というか、訓練校の皆が見慣れてるしね」

「否定しきれないのが悔しい」

がつくりと肩を落として落ち込むハヤブサだが、決して自分の素行を改めようと思わないらしい。

そのあたりが彼の悪い点でもあるが、だからこそハヤブサは上級生でありながらハヤトと仲が非常に良かったりする。まあ、単純にハヤトが素行不良でよく生徒会室に呼び出されているのも一因だけれど。

ともあれ、ソフィアと美卯はきやいきやい楽しそうにハヤブサを弄る。

「ていうか今日はどっちから……ああ、隠れてるって事はヤマト君からですね」

「だね」。みっちー先輩からなら、こんなところで隠れてないで、もっと遠くまで逃げてるだろうし」

「俺の行動見破られすぎワロタ」

「それだけハヤブサ先輩が追っかけられてるって事ですょ」

やれやれと溜息を吐きながら、美卯が肩を竦めた。実際ハヤブサがこうして逃げ回るのは殆ど毎日で、ある種の恒例行事として訓練校中で有名なのだ。

もちろん“殆ど”毎日なのであって、本当に毎日な訳ではない。

せいぜい2日に1回くらいの……あれ？ これもう毎日でよくね？

「まあそれは置いて——」

気を取り直したハヤブサが一旦話題を切り、次の話題につなげようとしたその時。

「待ていつ——！」

「「「!?!?!」」」

突如、凜とした声が辺りに響く。

その声に男達が慌ててあたりを見回せば、ソフィア達から少し離れた場所にある丘の上に、1人の少年が腕を組んで立っているのが見えた。しかし彼の顔だけは、不自然な逆光で見ることが出来ない。

「悪しき星が天に満ちる時、大いなる流れ星が現れ……」。

その真実の光の前に、悪しき星は光を失い、やがて墮ちる……。

人、それを「裁き」という……!!」

逆光に照らされたまま、少年はすらすらと口上を述べる。

そんな少年の口上に、ハヤブサが怯えの混じった怒鳴り声で問いを投げた。

「誰だアンタはっ!？」

だが、その問いに対する少年の答えは短く、明瞭なもの。

「貴様に名乗る名前はないっ!!」

言っが早いか、少年は高々とジャンプして空中に綺麗な放物線を描き、ハヤブサの後ろに着地する。

すると、逆光で見えていなかった少年の顔がソフィア達からようやく見えるようになり、その顔を見たソフィアと美卯は「あれ？」と声を揃えて少年の名を呼んだ。

「御剣副会長じゃないですか」

「みっちー副会長だ、やつほー」

「……っ、おいお前達。こついつ場面で名前をバラすな、お約束は守るべきだろう。」

それからみっちーと呼ぶなと何度言ったら……」

折角の登場シーンを邪魔され、不満そうに頭を振る少年の名は御^み剣^{けん}仁^に。

この訓練校の生徒会副会長であり、訓練校内でも5本の指に入る実力者として有名な少年だ。

「ごほんっ。まあ、それは今は置いておくぞ。それよりもハヤブサ、逃げるな」

「ぎくっ！」

咳払いと共に一度話題に区切りをつけ、それから御剣はかけている銀縁の眼鏡を軽く上げながら、背中の半ばまである黒髪をかき上げ、こっそりとこの場から立ち去ろうとしていたハヤブサを睨みつけた。

睨まれたハヤブサはギギギと音が鳴りそうな程にゆっくり振り向き、冷や汗をダラダラ流しながら愛想笑いを浮かべるのだった。

「い、嫌だなあ別に逃げないですよ？　これはちょっと前衛的な運動でして……」

「言い訳はいい。まったく、お前は何故わざわざリョウガを煽るんだ。」

お前のせいで書類が散乱して面倒なことになっているんだぞ。破けてたり燃えていない分マシとはいえ後片付けがどれだけ面倒だと思っっている」

「いやあ、リヨウガの反応が面白くてついつい」

「ついで毎回書類をあらされてたまるか。その後始末に私と朔也がどれだけ苦労しているか。」

くそっ、また胃薬を追加注文せねば……」

「みっちー副会長大変ですね」

「胃薬の量が増えたって聞きましたけど、大丈夫ですか？」

深い溜息を吐く御剣と、そんな彼の肩をたたいてのほほんと笑うソフィア。

美卯は心配そうな顔で彼の顔を覗きこみ、ハヤブサは「てへぺろ」と可愛らしく舌を出していた。男のてへぺろは死罪に値すると思うんだがどうだろう？

などという戯言はともかく。

胃の痛みに御剣が顔をしかめてくると、彼がさっきまで立っていた丘の影から、大きな照明用ライトを抱えたやや短めの黒髪をもった少年が、少しばかり覚束ない足取りで歩み出る。

「み、御剣君！ これ重いから手伝って欲しいんですけど……」

「な！？ 朔也！ それはそこに置いておけと言っただろう！？」

「いえ、ですがこのままここに置いておくと、帰るときに私が忘れそうだったので」

「私が覚えておくし、運ぶのも私がやると言っただろうが!？」

恥ずかしそうな表情を、そのやや大人びた顔に浮かべて現れたのは、この第4訓練校の生徒会長を務める月城つきしろ朔也さくや。怒る事が殆ど無く、誰にでも分け隔てなく接する彼は、一部では「仏の月城」と呼ばれている。

「ですが、御剣君の登場を演出するために借りてきたものですし、早めに返さないと……」

「だから返却は後で私がちゃんと自分でやると……ああもう、そんなフラフラしてまで抱えるな!

落としたら弁償になるだろう!? とりあえずそこに下ろせ!

……くう、また胃がキリキリと」

「す、すいません。それじゃあ……よつと。いやあ、重いですねこのライト」

持っていた大型ライトを地面においてから、朔也はもう一度照れくさそうに笑う。

そんな彼の声に頭を抱えて胃の辺りを押さえる御剣に苦笑しつつ、美卯は地面に置かれたライトと朔也の顔とを見比べ、首を傾げてみせた。

「月城先輩。そのライト、どうしたんですか？」

「ああ、御剣君が演出に使いたかったみたいで、ちょっと教官室から借りてきたんですよ」

「御剣先輩が……なるほど、さっきの不自然な逆光はコレが原因でしたか」

彼の説明に納得がいったのか、美卯はライトの方を見ながらしきりに頷く。

「わはー みっちー副会長は相変わらず手を抜きませんねー」

「当然だ。やる以上は何事も徹底的にやる、それが生徒会役員の血の掟だからな」

「いやいやいや！ 俺そんな物騒な掟聞いてませんけど！？」

「言っていないからな」

あっさりと言いきる御剣に、ハヤブサは右手で顔を覆って天を仰ぐ。

そしてハヤブサは天を仰いだまま、御剣に向かって問いかける。

「もし破ったらどうなるんでせうか？」

「なに、ちょっとしたペナルティがあるだけだ。具体的には他の生徒会役員に1週間学食を奢る、程度なものだな。軽いものだろう?」

「わーお、流石にこの事実にはヴェヌーシアさんも驚きを隠せませんのことよ?」

「気にするな。お前は良くも悪くも徹底的にやる人間だからな、問題ない」

「マジで!?!」

「マジで。そしてそれで思い出したが、そろそろ生徒会室に戻るぞ」

言いながら、御剣がハヤブサの制服の襟首を掴む。

そこでようやく「しまった!」と自分が逃亡中だったのを思い出したハヤブサだったが、捕獲されてしまった以上逃げる手立ては無い。

「ちいつ! 話に夢中にさせてから捕獲しにくるとは!! 汚いな! さすが副会長汚い!!」

「誰が黄金の鉄の塊か」

「まあまあ、ヴェヌーシア君もそんなに抵抗しないでください。ヤマト君がいつも通りかなり怒ってますから、先に生徒会室に戻って仕事をしていきましょう。」

そうすれば、ヤマト君も見逃してくれる可能性はあるでしょう?」

「む……絶対にありえない筈なのに、会長に言われると何故かありそうだと思ってしまう不思議」

「それじゃあ、帰って仕事を片付けてしましましょう」

言葉こそ穏やかだが、そう言った後の朔也と御剣の行動は早かった。

あつという間に御剣と共に彼の両腕を掴んでハヤブサを引きずっていけるような体勢になると、2人は揃って事の成り行きを見守っていたソフィアを美卯のほうを見る。

そして、2人とも微笑を浮かべてソフィア達に挨拶をした。

「それでは山城さん、ジュリーストンさん、気をつけて帰ってくださいね」

「宿舍までの距離は近いが、この時期は変質者も出るという話も聞く。十分に注意しろ」

「はい。つきー先輩もみっちー先輩も、頑張ってくださいね」

「月城先輩、御剣先輩、頑張ってください」

御剣達の挨拶に笑顔で手を振り、ソフィアと美卯は宿舍に向けて歩き出す。

少女達の背中が見えなくなったところで、朔也と御剣は、ハヤブサを引きずりながら生徒会室に向けてゆっくりと歩き出した。

「ちくしょう、今日こそはうやむやの内に逃げられると思ったのに」

「逃げようとするな。まったく、お前はやれば出来るのに何故仕事をしないのか……」

「そこにゲームがあるから、ですかね」(どやぁ……)

「……………朔也。今度生徒会の予算で胃薬を買ってくれ、ダースで」

「検討しておきます。ヴェヌーシア君も、あまり御剣君に苦勞をかけないようにしてくださいね？」

「前向きに検討したいと秘書が申しておりました」

頭を抱える御剣と、困ったなあと苦笑する朔也。
第4陸士訓練校で名物となっている、そんなやり取りの一幕であった。

「あ、ハヤブサ見つけた」

「あ、ヴェヌーシアさん見つかった」

「見敵必殺」

「わーお、殺意ビンビンすぎて泣きそー」

「……………朔也。5ダースに増やしておいてくれ」

「了解しました」

この後、訓練校の敷地内でガチバトルを繰り広げるハヤブサとリョウガ、そしてそれを全力で止める御剣と朔也の姿があったという。そしてこのガチバトルは、最終的に高町なのは教官が割って入るまで続いたらしい。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語になる予定だったナニカだ。

・今日のおまけ

『ハヤブサと御剣』

ハ「副会長、俺思っんですけど」

御「何だ？」

ハ「リトバスは人生。そして俺の人生の主役は俺。

つまり、リトバスは俺と言っても過言じゃ無いんじゃない——」

御「消し飛ばすぞ」

『リヨウガと朔也』

朔「ねえ、ヤマト君？」

リ「どうしたの、朔也さん？」

朔「高町教官の砲撃って凄いですよね」

リ「思い出させないで」

『ソフィアと美卯』

美「じー……」

ソ「？ どしたの、美卯」(どたぶーん)

美「……」(ぽよん)

ソ「変な美卯〜」

美「大丈夫、まだ成長期。これからこれから……」

第3話 『生徒会役員共と、巻き込まれた少女達』（後書き）

正直に言おう。ロム兄さんがやりたかったただけだ。
どうも、ラモンです。

そんなこんなで第3話。

今回は生徒会メンバー全員と、出せていなかったハヤト達のクラスメートの女子2人に出演していただきました。

御剣さんを大分はっちゃけさせたが、大丈夫だろうか？

怒られたら即行で書き直そう……（汗）

応募して頂いた作者の皆さん、何か自分のキャラでご不満な点などございましたら、メッセージなどで教えてください。

場合によっては最初から書き直しといたしますので。

それと、ここでちょっとお知らせ。

今回で3馬鹿枠、クラスメート枠、クラス委員枠、生徒会枠での出演メンバーは全員登場させることができました。

なので、ここら辺でこの枠のメンバー紹介を載せようと思います。

名前、年齢、髪型、外見、性格の5項目を載せたいと考えています。

さて、次回は残っている上級生枠、教員枠の皆さんに出演していただきたいところですが……教官枠全員登場はちょっと難しいかもです
すねえ。

流石に、教官が一気に登場となると、職員室の話になっちゃいそうですし。

あ、ちなみに教官としてなのはも出てきますので、そのあたりもよければお楽しみに。

それではまた、次の話で。

自分のキャラの扱いに納得いかない場合、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。出来る限り修正します。

登場キャラクター紹介 その1（前書き）

今回は

- ・【3馬鹿枠】
- ・【クラスメイト枠】
- ・【クラス委員枠】
- ・【生徒会枠】

以上の4枠のキャラクターを紹介します。

登場キャラクター紹介 その1

・【3馬鹿枠】

【男子】

1.

名前：ハヤトⅡロックウエル

年齢：16

髪型：ボサボサの短い金髪

外見：目は緑っぽい青。ややツリ目がち

性格：楽天家。巨乳マニア。そしてエロい

備考：3馬鹿の馬鹿担当。御剣の胃薬摂取量を増やす原因その1。

成績は下の中

2.

名前：ルークⅡリーゼンベルグ

【F20Cさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers Lost Memory 他】

年齢：16

髪型：金髪の天然パーマ。長すぎず短すぎず

外見：紅色の瞳。身長は3馬鹿で一番高い

性格：エロ魔人。気さくな性格。だがエロい

備考：3馬鹿のエロ担当。御剣の胃薬摂取量を増やす原因その2。

成績は下の中、上、下とムラがある

3 .

名前：リオスⅡコーネルド

【神崎はやてさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers
氷翼の天使 他】

年齢：16

髪型：プラチナブロンドの短髪

外見：女の子と見紛うくらいに可愛い。金色の丸っぽい目。

身長は3馬鹿で一番低い。

性格：優しく誠実。苦勞人

備考：3馬鹿の理性担当。最近胃薬を飲むようになった。成績は上
の中

・【クラスメイト枠】

【男子】

4 .

名前：アルトリアⅡムーンライト

【キャビア伯爵さん著：魔法少女リリカルなのは 新約・純白の騎
士姫】

年齢：15

髪型：金髪のポニーテール。長さは首の辺りまで

外見：リオスに負けず劣らず可愛い。緑色のたれ目

性格：そうそう怒らないが、涙もろい。そして総受け

備考：男の娘担当。弄る側、弄られる側どちらもこなす器用な少年。
成績はかなり良い

5.

名前：アウル「アパレション

【EXAMさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers～
亡霊の弾丸～】

年齢：16

髪型：白色のミドルロング。首の辺りでひとつに纏めている

外見：黒く中性的な瞳。身長はルークと同じくらい。イケメン

性格：大人っぽく、面倒見が良い

備考：クラスのお兄さん担当で良心担当。成績はトップ10以内

6.

名前：ユウキ「エレンリッド

【結城光さん著：魔法少女リリカルなのはStrikers～運
命を背負いし者～】

年齢：16

髪型：茶髪で肩まで伸ばしている

外見：青緑色の瞳、身長はハヤトと同程度

性格：底抜けに明るいムードメーカー。しかしエロい

備考：クラスのムードメーカー。ハヤトやルークと一緒によく馬
鹿をやっている。

御剣の胃薬摂取量を増やす原因その3。成績は中くらい

【女子】

7 .

名前：高町ゆず

【あーちゃん後輩さん著：W I S H 王女が願う夢】

年齢：16

髪型：黒のセミロング。肩のあたりまで

外見：切れ長な右がオレンジ、左が紫のオッドアイ。身長は低め。
胸は大

性格：のんびり屋で落ち着いている。悪く言うとお婆ちゃんっぽい
備考：お婆ちゃん扱いされるとイジける。基本はツツコミ担当。成績は中〜上

8 .

名前：草薙 蒼くさなぎ そうつ

【Kの2乗さん著：魔法少女リリカルなのはStrikers】紅
闇の少年と機人の少女〜】

年齢：15

髪型：藍色（濃いめの青）の、腰まで届くストレート

外見：水色の細い瞳。身長はゆずと同じ位。胸は貧

性格：人をからかうのが好き。ブラコン

備考：主に意地悪担当。胸の事をからかわれるとキレて凄いことに。
成績は中

9 .

名前：山城 美卯やましろ みつ

【検体番号10032さん著：告白 -アフターストーリー-】

年齢：16

髪型：こげ茶色の肩まで届くポニーテール

外見：明るい茶色のたれ目。身長はゆず、蒼と同じ程度。胸は小

性格：基本は面倒臭がりだが、根は真面目

備考：主にツツコミ担当。面倒見が良く、よく友人に相談を受ける。
成績は中くらい

10.

名前：ミコト「タツナミ

【ムーギネーターさん著：【習作】魔法少女リリカルなのはStr
ickers（禁断の刃）】

年齢：15

髪型：肩にかかる程度のショートカット。茶髪

外見：やや釣り目がちの黒い瞳。身長はやや高め。胸は小

性格：負けず嫌い。ツンデレ

備考：主にツツコミ、ツンデレ担当。胸の大きさでからかわれると
キレル。成績は良い

・【クラス委員枠】

【男子】

11.

名前：氷上京谷
ひかみ きょうや

【Kyoさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers～最強の魔導師は転生者～】

年齢：16

髪型：茶色の短髪

外見：大きめの金色の瞳。身長はハヤトと同じ程度

性格：面倒見が良く、ツツコミ気質

備考：苦勞人。主にハヤトとルークのせいで氣苦勞が絶えない。成績はトップクラス

【女子】

12・

名前：ソフィア「ジュリーストン

【神崎はやてさん著：新魔法戦記リリカルAngels～The Rule of Gods～】

年齢：14

髪型：深緑色のポニーテール

外見：オレンジ色の瞳で垂れ目。身長はクラスで一番低い。胸は巨

性格：天真爛漫で無邪氣

備考：クラスの癒し担当。クラス最年少で、皆から可愛がられている。成績は中の上

・【生徒会枠】

【男子】

13.

名前：月城 朔也 つきしろ さくや

【雨凧 雪人さん著：魔法少女リリカルなのはStrikersとある年増の銃騎士】

年齢：19

髪型：黒のミディアム、首の辺りくらいまで

外見：黒い瞳で垂れ目がち。身長はやや高めでイケメン

性格：温厚で年下に甘い。やや天然気味

備考：生徒会長。仕事も出来て訓練生に絶大な人気を誇る……が、時々天然ボケな行動をしてしまう時も

14.

名前：御剣 仁 みつるぎ ひとし

【Hagalaさん著：とある最強系主人公達の放蕩記】

年齢：19

髪型：黒色で、肩甲骨あたりまでのロングヘア

外見：ツリ目な黒の瞳。銀縁の眼鏡をかけている。身長は高くイケメン

性格：悪に義憤し善を嗤うタイプ。保護者属性。ツッコミ

備考：生徒会副会長。仕事も出来るし人気もあるが、もの凄い苦勞人で最近はお友達が胃薬が友達。

生徒会の中では一番苦勞している人。

15.

名前：リョウガ・ヤマト

【十五郎さん著：魔王少年リリカルりょうが 他】

年齢：10

髪型：黒のショートで、前髪を分けて目に入らないようにしている
外見：垂れ目気味の青緑色の瞳。身長は年相応に低く、ゆず達よりも低い

性格：優等生を演じているが、腹黒。むつつりだったりもする

備考：生徒会会計。飛び級で訓練校最上級生になった天才。基本的にいい子だが、実は腹黒。

彼の本性を知っているのは極一握りの人間だけ。

16・

名前：ハヤブサⅡヴェヌーシア

【タケケさん著：魔法戦記リリカルなのは〜逆心を抱く戦闘機人〜】

年齢：17

髪型：赤色でウニ頭

外見：藍色でやや釣り目がち。身長は中くらい

性格：やや面倒臭がりだが、人のピンチは放っておけない

備考：生徒会書記。ハヤトやルーク達と仲が良く、よく一緒にゲームをやっている。

御剣の胃薬摂取量が増える原因その4

登場キャラクター紹介 その1（後書き）

とりあえず、簡単なプロフィール紹介をやってみました。
どうも、ラモンです。

年齢などは、もちろん訓練校の話ですので原作どおりではなく、ある程度若返ったり年を取ってもらったりしました。

魔力ランクなども一応決まっていますが、多分殆ど関係ないので載せておりません。

うーん、やっぱりコレだけ人数が多いと、流石に被っちゃう部分がありますねえ。画像などがあればいいんですが……（汗）
まあ、細かいところは本編中で書き表せるように頑張ります。

一応作者の皆様の名前と作品名を載せておきましたので、詳しいプロフィールなどが見たい場合は、原作の方で確認していただければ幸いです。

それと作者の皆さんへ。

このプロフィールなどで訂正して欲しい部分がありましたら、感想やメッセージで訂正箇所を教えてください。すぐに訂正致します。

ではでは。

第4話 『教育実習生が美人だと、何か嬉しいよね』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

突然ではあるが、この第4陸士訓練校に勤めている教官達は、その全員が『教官資格』という資格を持っている。これは時空管理局が発行している資格で、誰かに魔導師としての訓練を行う時には必ず持つて居なければいけない資格だ。

これとは別に『戦技教導官』という資格もあり、その受験にもこの『教官資格』は色々関わってくるのだが、この場ではその説明は割愛しよう。

そしてそれを取るには、厳しい試験と1年間の教育実習を受ける必要がある。

ちなみに教育実習は必ず訓練校で行わなければいけない。

試験と教育実習。

この2つを終えて、初めて『戦技教導官』という資格を得る事が

出来る。

戦技教導官を目指す人間は多いが、その殆どが実は教育実習で挫折することが多い。

というのも、実際に人に物事を教える難しさに打ちのめされてしまっからだ。

なにせ相手は訓練生。正規の局員になる前の、それこそ基礎から教えないといけない人間達。

そんな彼等に魔導師としての訓練をつけるというのは、生半なことでは出来ない。

毎年1000人以上の人間が戦技教導官を目指す中、実際になれるのは10人かそこらという凄まじい倍率を誇っているのには、そういう理由がある。

「……ふう」

“実習生用日誌”と書かれた冊子に何事かを書き終え、息を吐いて手に持っていたペンを置いた『高町なのは』も、そんな戦技教導官実習生の1人で、半年ほど前からこの第4陸士訓練校で実習をしている。

「えっと……うん、これで大丈夫かな」

彼女が見直している“実習生用日誌”とは、まあ言うなれば毎日の実習で実習生が学んだ事を書き記すノートのような物だ。1日の

実習が終わった後に、実習生はこれを自分の実習担当教官に渡し、簡単な評価をしてもらってその日の実習を終えるのだ。

なのは最後に軽く自分の日誌を見直してから席を立ち、自分の実習担当教官である女性の席へと歩いていく。

「マリーナさん、いま大丈夫ですか？」

「ん？ ああ、大丈夫なのはちゃん」

声を掛けられた女性――なのはの実習担当であると共に、模擬戦などの実戦訓練担当教官であるマリーナ「イシユバロン」は、その艶やかな黒のロングヘアを風に靡かせつつ、座っていた椅子を回転させてなのはに顔を向けた。

「今日の分の日誌、持ってきました。チェックをお願いしますか？」

「あら、相変わらず早いだね。ハヤトやルークとか、おばかさん達に見習わせたいわ」

「にやはは……」

日誌を受け取りながら溜息を吐くマリーナに、なのはは苦笑を返すしかなかった。

否定しないあたり、正直彼女も心の底では同意しているようだが。

「どれどれ……」

マリーナは日誌を受け取ると、金色の光る美しい目を細めて視線を動かす。

「うん。今日も特に問題なし、相変わらずいい出来よ」

「はやっ!？」

「速読は天才の嗜みよ? 覚えておきなさい、なのはちゃん」

「は、はあ……」

受け取った日誌に2秒とかからず目を通して、冗談混じりに片目を閉じつつ、持っていた日誌をなのはに返すマリーナ。ただ、その冗談がウケているかどうかは……なのはの苦笑が物語っている。

しかし言った本人は彼女の表情を気にした風も無く、話を続けるのだった。

「舞の紹介だっていうから少し心配だったけど、ホントなのはちゃんはいいい子ね」

「そ、そんなこと——」

「当然よ! なんとって、なのはちゃんはこの私が小さい時から、

手取り足取り腰取り胸取り色々なことをねっとりきっちり教えてあげてたんですから！」

「うひゃあっ!？」

うんうんと頷きながら誉めてくるマリーナの言葉を、頬を赤くしながらなのはが否定しようとした時、突然なのはの背後に腕を組んでふんぞり返っている舞が現れた。

「ま、ママ舞さん!？ 驚かさないでくださいよお……」

「えゝ？ いいじゃない、私となのはちゃんの仲でしょ？」

「誤解を招くような言い方しないでください、舞さん」

「そなたっ！ あの夜の事は遊びだったって言うの!？」

あんなに激しい夜と一緒に過ごしたのに……舞さん、なのはちゃんがそんな冷たい子に育っちゃうなんて悲しいっ！ 泣いちゃう！」

「だから、誤解を招くような言い方しないでくださいってば!！」

大袈裟な泣き真似をする舞になのはが慌てて抗議するが、もちろん舞は気にしない。

ちなみになのはと舞は、なのはが幼い頃からの知り合いで、彼女が戦技教導官を目指す時によく舞が相談に乗ったりした仲である。決してやましい関係は無い。

だから、長い付き合いであるのはも、自分がからかわれている

事は分かっているのだ。

ただ、内容が内容だけに無視する事が出来ないだけで。

「ちょっといいかしら、舞？」

「ん？ 何、マリーナ？」

「マリーナさん！」

そうして舞がなのはを暫くからかっていると、不意にマリーナが口を挟む。

割って入ってきた彼女に、なのはは味方が来たと目を輝かせた。しかし。

「ちょっと“腰取り胸取り”とか“ねっとり”とか、“激しい夜”のあたりを詳しく教えてくれる？」

「味方だと思ったらマリーナさんも敵だった!!」

「……いくらまでなら出せるかしら？」

「そうね……100円でどう？」

「安っ！？ 私の過去安っ！？ っていうか人の過去を売り買いしないでください！」

「そうよ。マリーナってばひどい」

「舞さんですよね！？　むしろ舞さんが主犯ですよね！？」

「全く、舞ってば酷いわねえ。なのはちゃんもそう思わない？」

「マリーナさんですから！　2人とも共犯ですから！！」

顔を真つ赤にして猛然と抗議するのは。

しかし、彼女の抗議が受け入れられることは終ぞ無かったという。

●陸士訓練学校のドタバタな日常。

第4話　『教育実習生が美人だと、何か嬉しいよね』

舞とマリーナによるなのは弄りがひとしきり続いた後。

なのはに抱きついたまま、彼女をからかい続ける舞の襟元が突然誰かに掴まれる。

「何を騒いでいるんだ、左にマリーナ」

「きゃんっ」

「あら、どうしたのエリス？」

「教官室で騒いでいるから見に来てただけだ……まったく」

舞の襟首を掴んだまま溜息を吐くのは、肩口で揃えられたグレーの髪と、左目につけている眼帯が特徴的な女性——エリスこと、エリスティン＝カルヴィン。

今襟首を掴んでいる舞やマリーナの同僚で、舞と同じ基礎訓練の担当教官だ。

「廊下の向こう側まで丸聞こえだったぞ。というか実習生をからかうな」

「別にからかってないわ。スキンシップよ、スキンシップ」

「あんなスキンシップがあつてたまるか」

悪戯っぽく笑うマリーナを責めるように見つめ、エリスは溜息を吐いて言葉を続けた。

「大体だな、マリーナはともかく左は年長者だろう。何故率先して騒いでいるのだ」

言いながら、エリスは次に自分が首根っこを掴んでいる舞のほう

に視線を向ける。

その視線を受けながら、舞は口を尖らせてぶーぶー不平を漏らした。

「だってー、なのはちゃんの反応が可愛いんだもん。私、可愛い女の子大好きだしー」

「可愛いって誉められてるのに全然嬉しくない！ 不思議！」

「なのはちゃん、すっかりツツコミが板について……」

「マリーナさんも原因の筈なのに、まるで第3者みたいな発言！ 不思議！」

「うんうん。この調子ならなのはちゃんも立派なツツコミ役になれるわね」

「私は教官資格の実習生なのに、ツツコミ役として認められた！ もうどうにでもなれ」

両手を挙げて何かが吹っ切れた笑顔のなのはに、マリーナは水口リと目元から零れた涙を拭う。彼女がそうだった原因の一端は自分にある、という事実は見ないことにしているらしい。

そんなマリーナに溜息を吐き、エリスは気の毒そうな視線をなのはに向けた。

「お前も大変だな、高町」

「うう、お気遣いありがとうございます。エリスさん」

「ツツコミ、頑張れよ」

「はい……ってそっちを頑張るんですか!？」

「冗談だ」

驚きに声を上げるのはを見て、エリスは小さく笑いながら彼女の肩を叩く。

それで自分がかかわれているのだと気づき、なのはが再び頬を膨らませ、舞たち3人はそんな彼女を見て謝りながら笑うのだった。

「も、もう！ エリスさんも舞さんもマリーナさんも酷いですよ！」

「くつくつ……いや、本当にすまないな高町」

「なのはちゃんの反応が可愛いから、仕方ないのよ」

「ねー？ 私達みんなのアイドルだもの」

「うー、エリスさん、助けてーっ！」

「まあそう言っな。左もマリーナも、どちらもお前が好きだからこそなのだし」

謝りながらも笑っているエリスと、満面の笑みで頭を撫でてくる舞とマリーナ。

なのはも抵抗はしてみるが、2人を相手に抵抗しきれるものでもなく、何だかんだで頭を撫でられてしまうのだった。しかも、本能的にもちよつと嬉しかつたりするらしい。

高町家の末っ子という事もあり、基本的に愛でて貰うのは好きなのだろう。

ただし、なのはもただやられっぱなしで居ることを良しとする女ではない。

「エリスさん！ 助けてくれたらコレあげますから！」

「何を……っ！！ そ、それは！！！」

エリスに助けを求めながら、なのはが差し出した物。

それは、『月刊 にゃんこ大百科』というタイトルの1冊の雑誌だった。

もちろん舞やマリーナは特に反応を示さないが、それを見た瞬間エリスは目の色を変えて声を上げる。

「にゃんこ大百科の中で唯一発行部数が少なく、いまや猫好きの間では数十万という値段で取引されることもある、付録として『等身大にゃんこぬいぐるみ』が付いている3月号じゃないか！！」

た、高町！ 本当にそれを与えるというのか！？ にゃんこぬいぐるみごと！？」

「助けてくれたら喜んで！」

「左！ マリーナ！ それ以上高町を弄るといふなら、私が相手になるぞ！！」

今の私は、阿修羅すらも凌駕する存在だ！！！！」

なのはの返答を聞くや否や、目を輝かせてなのはを背に庇ってそう宣言するエリス。

そんなエリスを見て、舞とマリーナは苦笑が零れるのを隠せない様子だった。

「なんという変わり身の早さ、これにはおねーさんも思わず苦笑い」

「相変わらずの猫好きよねー」

もう読者諸兄はお気づきだと思うが、エリスは無類の猫好きである。

なにせ、以前訓練中に猫がグランドに入ってきた際、訓練をほっぽりだして時間が終わるまで猫と戯れていた……という逸話を持つほどだ。

エリスと付き合いの長い舞とマリーナからすれば、この程度は折込済みの事。

「で、どうするマリーナ？ なのはちゃんは十分弄ったし、今日はやめておく？」

「うーん、それはそれでいいけれど……どうせだし、もうちょっと

遊びたくないかしら？」

「あら、気が合うじゃない」

舞とマリーナは一度顔を見合わせ、それから悪役的な笑いを浮かべてエリスを見る。

ちなみになのはは、エリスの背中に隠れながら「計画通り」とでも言いたげな笑みを浮かべているようだ。意外と黒いのはであつた。

「いいわよエリス？ 私とマリーナ、2人同時に止められると思うなら、やってみなさいな」

「ただし、その頃にはもう貴女は八つ裂きになっているかも知れないけどね」

「なんか物騒なこと言ってる！？」

「もちろん私達が勝つたら、なのはちゃんを自由にさせてもらうわよ」

「【禁則事項】な事も、【検閲】とか【削除】とか、あと【巨乳こそ至高】みたいなことも」

「やめて！ この小説が18歳未満お断りになっちゃうの！-」

「よかろう！ 私に勝てたなら、好きにするがいい！-」

「やめてエリスさん！ 本人の意思を無視して承諾するのやめて！」

何故かノリノリで売り言葉に買い言葉を交わすエリスと舞たち、そしてその間に入って必死にツツコミを入れているのは。半分自業自得だが、少しだけ可哀想。

とにかく、3人の間に走る緊張が膨れ上がり、本当にぶつかり合う……そう思われたその時。

「左きょうかーん、やりたくもない補習のプリントが終わったんで持ってきましたー」

「ハヤト、自業自得なんだからもう少し反省しようよ」

「自業自得って、別にテストを白紙で出ただけじゃなーか」

「何故そんなことをしたし」

「前日ゲームで徹夜したせいで何も分からなかった。だからつい力ツとなってやった。」

後悔もしていないし反省もしていない。多分次のテストも同じような事をする」

「はああ……次はティアナとかにも手伝ってもらって、是が非でも勉強させなきゃ」

教官室のドアを開け、2人の少年達が絶妙なタイミングで入って

きた。

入ってきたのはへらへらと笑っているハヤトと、大方ハヤトに無理やり付き合わされたのであろう、憂鬱そうな顔で溜息を吐くリオス。

「ああ！ ハヤト君にリオス君、丁度いいところに！」

「「え？」」

「「「……………」」」

天の助けとばかりになのはが2人を呼び、2人はなのはの方……つまりは向かい合ってゴゴゴゴという擬音つきな効果音を出しているエリスたちを見た。

そして――

「左教官いなかったな。仕方ない、今日は帰るか」

「そうだね。帰ったら何しようか？」

「今日はパワプロでもやるかなー。コントロールG、最高球速200キロのピッチャー作ったんだよ。」

もう全然狙い定まなくなつて死球連発しててマジ笑える」

「なにそれこわい」

見なかったことにして教官室から立ち去ろうとした。

「ちょっと待って！ この状況スルーしちゃうの！？ てゆーか待って！ 本当に待って！！」

もちろん本当に帰られては堪らないので、なのはは必死になって2人を呼びとめる。

呼び止められた以上さすがに無視する訳にもいかず、ハヤトとリオスは足を止めて、ちよつと嫌そうな表情でなのはを振り返った。

「なんですかー、高町教官」

「僕達、できれば帰りたいなーって思うんですけど」

「そ、そんな事いわないで助けてよう。このままじゃ私、凄い事されちゃうかもしれないの」

涙目になって訴えるなのは。

一応焚きつけたのは彼女だが、流石にここまで事態が大きくなるとは思ってなかったらしい。

まあ、普通あそこまで悪ノリするとは思わないだろう。

「助けるって言っても……なあ？」

「力になってあげたいのは山々ですけど、僕らじゃ舞さん達はちょ

つと……」

「ううう……確かに、冷静に考えてみればそうなの……」

ふざけてはいても舞もマリーナもエリスも教官なのだ。

さすがに訓練生達との実力差は歴然としている。そんな教官を3人も相手に止めろ、というのは些か無理なお願いだっただろう。しかし、なのはもなのはで必死なのだ。

「も、もし何とかしてくれたら、なんでもしてあげるから！」

だからなのは、ついそんなとんでも発言をしてしまった。それが更なる混乱を呼ぶ事になるとは露知らずに。

「マジで！？ パンツ貰うとかもオツケーですか！？」

「えっちなお願いは却下！」

「なんだ、ただの嘘か」

「いや……普通にハヤトの想像が最低なだけだよ」

「男なら誰でもこういう発想するだろ………するだろ………」

自分の欲望を一言で却下されて泣き崩れるハヤト。

考えている事はアレだが、男ならば仕方ない。誰だってそうする、俺もそうする。むしろなのは程の美少女を前にしてそういう事を思わないほうが失礼だと思うのだがどうだろうか？

いや男ならばきつと誰しもが思うだろう。思わない奴は男としてどうなのか。

……閑話休題。

「じゃあ、止められたら次の模擬戦で手加減してもらって事で」

「うん。よろしくね、ハヤト君、リオス君！」

「どこまで出来るかわかんないですけど、頑張ります」

「頑張れリオス！」

「ハヤトも来るんだよ！」

「えー……」

暫くなのはと交渉を繰り返し、仮に止められた場合の報酬を約束したハヤトとリオスは、未だに睨みあっている舞たち3人の元へと向かう。

そして3人のすぐ側までやってくるが、睨みあっている3人はお互いを牽制するのに忙しく、ハヤト達に反応しようとはしない。それを確認してからハヤトとリオスは一度互いの顔を見て頷き、それぞれの懐から最終兵器を取り出した。

「左教官、やめてくれたらこの『ドキッ！ 美少女だらけの水泳大会、ポロリもあるよ！』のDVDを差し上げますぜ！」

「マリーナさん！ この『新型バイクモーターショー招待券』を上げますから、やめてください！」

「そしてカルヴィン教官には、こちらのゲーセン限定『にゃんぐるみ』各種を！」

どうやら舞とマリーナとエリス、それぞれが好きな物を餌に止めさせようという作戦らしい。

しかし、3人はハヤトとリオスの方を見て鼻で笑いながら答えを返す。

「はっ！ その程度で私たちが釣れると思わない事ね！」

「ええ。まったく、教官を相手にふざけた事をするわ」

「元々私は高町から貰う物があるからな、今更そんな物など……」

「くっ……やはり失敗か！？」

「やっぱり古典的過ぎたかな」

舞たちの反応に作戦失敗かとハヤト達が渋い顔をする。だが――

「さて、それじゃあ私は仕事があるから戻るわ。ハヤト、それは後で私の机に置いてね」

「そうね。私もちよつと仕事しなきゃ。あ、その招待券もらえるかしら」

「おっと、そういえばまだ片付けてない書類があつたな。仕方ないからそちらをやらねば。」

……ああ、にゃんぐるみは有難く受け取らせて貰おう。断るのも勿体無いからな」

—— 3人はそれぞれ適当ないい訳をしながら自分の席へと戻っていく。

もちろん、3人ともハヤトとリオスが提示した商品を受け取る事は忘れない。

「……ええー」

「ま、まあ作戦成功って事かな？」

「チョロすぎだろ教官達、明日からチョロインって呼ぼう」

「わ、私の気苦労って一体……」

「なのはさんのは自業自得じゃありません？」

「うう、リオス君が意外と辛辣なの」

最後にそんな感想を残し、放課後の教官室騒動は終わりを見せたのだった。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語……だった気がしたが、そんな事は無かったぜ！

・今日のおまけ

【エリスとにゃんこ＋ハヤト】

エ「……」くっ

ぬこ「にゃーん」

エ「はぁぁ……可愛いにゃぁ、可愛いにゃぁぁぁ……」
ほーら、こっちおいで！。にゃんにゃーん♪」

ハ「ぬう……！　これがギャップ萌えか……！」

エ「お前は失せろ」

ハ「（・ω・）」

【舞とマリーナ】

舞「……ねえ、マリーナ」

マ「なあに？」

舞「可愛い女の子って、いいわよね」

マ「そうね、素晴らしいと思うわ」

舞「同士よ……」

【なのはとリオス】

な「リオス君、さつきはありがとうね」

リ「あ、そ、そんなことないですよ!」

な「お礼に、今度一緒にデートしてあげようか?」

リ「うええっ!?!」

な「ふふっ、冗談だよ、じょうだん♪」

リ「……そういう心臓に悪い冗談はやめて頂きたい。死んでしまいます」

第4話 『教育実習生が美人だと、何か嬉しいよね』（後書き）

やっと書けたー……けど、まだ教官枠全員出せてないという。
どうも、ラモンです。

今回は教官枠の女性3人と、原作キャラからは高町なのは嬢にご登場いただきました。

本当は教官枠だけで話を作りたかったんですが、中々上手く出来なかったので、何回かに分けてやる事に。

ちなみに、この作品でなのはの年齢は17歳です。

この頃は戦技教導官の資格持つてるだろ、とか年齢おかしくね？
と思われるでしょうが、こまけえことはいいんだよ！ の精神で見逃してくださいお願いします（汗）

応募して頂いた作者の皆さん、何か自分のキャラでご不満な点などございましたら、メッセージなどで教えてください。

場合によっては最初から書き直しかしますのです。

さて、次回は教官枠の男性陣と、上級生枠の2人を登場させたいです
すね。

活動報告で色々とアイディアも頂きましたし、それを元に頑張って
書きたいと思います。

それではまた、次の話で。

自分のキャラの扱いに納得いかない場合、すぐにメッセージなど
でお知らせくださいませ。出来る限り修正します。

第5話 『パーティーゲームの友情破壊率は異常』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

訓練校にも休日というものは、当然ながら存在する。

この休日を使って、訓練生達は実家に帰ったり友人と町に繰り出したり、それぞれが思い思いの方法で青春を謳歌しているのだ。中には恋人同士でデートとしゃれ込むリア充も居る。爆ぜろ。

ともあれ、そんな青春を謳歌する訓練生達の一日を追ってみよう。

「おい、さつきからヨッシー使ってんの誰だよ。いい加減崖んトコで人のこと卵にして捨てた上に、戻ってきたところで投げのコンボばつかすんのやめろ、ぶっ殺すぞちくしょう」

「ホームランバットを手に入れた、それまではまだ良いのじゃ。問題は、それを持った瞬間に画面端で待ちプレイをした拳句にハメ技を使ってくる奴がいることじゃな。」

いい加減にせんと、いかに温厚なわらわもキレルぞ」

「てゆうかさつきから私がピンチになると見逃さずに3人で集中攻撃ってなんなの？　これはあれ？

つまり私にリアルファイトを申し込んでるって訳なのかしら？

いいわよ？　買うわよ？

原型も留めないくらいに電撃で黒焦げにしてあげるわよ？」

「負け犬の遠吠えなんて聞こえないっていう。ででででっていう（緑の恐竜風に）」

いきなりギスギスした空気を醸し出しているのは、いまや懐かしい某大乱闘ソフトをやっている、ルーク、ゆず、ミコト、ハヤトの4人だ。4人の側ではリオスと美卯、京谷の3人が見学している。折角の休日に行きこともなく、青春真っ盛りの男女がこれでもいいのかと思わなくも無いが、まあこれはこれで青春ということなのだろう。

「ねえ、そういうギスギスしたのやめようよ。何で4人とも仲良くゲーム出来ないの？

楽しくゲームしようよ……」　　というかハヤトはマジで自重しようよ」

いますぐにでもリアルファイトに突入しそうな4人を見ながら、

リオスが盛大に溜息を吐く。

「ハヤトは格ゲーでも厨キャラを平然と使い、初心者相手に全力でくる真性の糞野郎だからな。

ある格ゲーの話だが、初心者の俺に対して迷いもせず『金ジョニー』を使ってきた時は、流石の俺もコイツ今すぐ殺してやろうかと本気で思った。むしろ止められなかったら殺ってた」

「桃鉄やった時も酷かったもんね……」

「ありとあらゆる妨害カードの断続的使用はもちろん、新幹線カードなんかの進行系カードを使いまくって他人に貧乏神をなすり付けた後の、躊躇の欠片もない全力逃走。拳句にわざわざキングボンビーにしてからなすり付けるなんていうのも日常茶飯事」

「あの時、僕が止めなかったら間違いなく美卯はハヤトのことぶっ飛ばしてたよね」

過去にあったハヤトの悪行を振り返り、怒りを新たにする京谷と美卯。

やってきた事を考えてみれば、正直今すぐぶん殴られても決して文句は言えないだろう。むしろ友人全員に絶交された拳句、クラス全員から無視されても何一つ文句は言えない所業だ。

「でも、その割にハヤトってこういうゲームだと1位はあんまり取らないよね？」

「別に1位狙ってる訳じゃねーしな。ぶっちゃけ俺の妨害に腹を立てて、復讐しようとして頑張った拳句に不本意な結果になって落ち込む様を眺めるのが凄く楽しいだけだ。

前回の桃鉄の時、ゆずが俺にキングボンビーをなすり付け返そうとした拳句、最終的に最下位になって凹んでいた時なんぞ絶頂すら覚えたね！」

「『最低だコイツ……』」

悪気の欠片も見せずに齒を輝かせるハヤト。

それを見て、リオス達見学組は頭を抱えることしか出来なかった。そうこうしている間にもゲームは続き、戦況はいよいよ終わりが見えてくる。

「くうっ、このままじゃわらわが負けてしまうのじゃ！ こうなったら……」

と、そこで最も追い詰められたいたゆずが、叫びながらおもむろに手を伸ばす。

そして――

「秘技！ コントローラー外し！！」

「ああっ！？ ちょっとゆず、何すんのよ！？」

「ちよっ、お前ソレ反則だろ！」

ハヤトとルーク、ミコトのコントローラー端子を思い切り引っこ抜いた。

もちろんコントローラーを挿してなければゲームは出来ない訳で、ハヤト達の操作していたキャラは画面の中で沈黙、ピクリとも動かなくなる。

「うはははは！ この隙にわらわが一番になるのじゃー！」

「ふざけんな、さつさと挿しなおして……っ！？ くっそ、あんにやろう！ 挿しなおせないように、コードを全部自分で持ってやがる！」

「卑怯よゆず！ ハヤトみたいなクソ外道じゃあるまいし、アンタそこまで堕ちたの！？」

「おい、ついでとばかりに俺をディスんな」

「何とでも言うがいいのじゃ！ 勝てば官軍、負ければ賊軍！ 終わりよければ全て良し！！

過程や……！ 方法なぞ……！ どうでもよいのじゃあ……っ……！！」

勝利を確信して高笑いを響かせるゆず。

しかし、そうは問屋が卸さない。こういう場合、えてして他のメンバーが取る行動は決まっている……というかやる事はひとつしかあり得ない。

「共鳴術技、電源オフ」

「にゃーーーーーっ!?」

そう、電源を切る事だ。

これはコントローラーを抜かれた人間が行う最終手段であり、そして同時にリアルファイト開戦の合図ともなる危険な奥義。しかしルークはそれを一切の躊躇なく断行した。

恐るべき勇気である。

「くきーっ！ もう許さんのじゃ！ お主ら全員表にでるのじゃーっ！」

「じょーとーだゴルアッ！ ボツコボコにしてやんよ！」

「ゲームでの恨み、晴らさせてもらおうじゃないの！ 特にハヤト！ アンタは潰す!!」

「やれるモンならやってみるやド貧乳！ 前と後ろの判別もつかない奴になんざやられるか！」

「……やっぱりこうなったか」

歯をむき出しにしていがみ合う4人を見て、観戦組だった3人は盛大に溜息を吐くのだった。

●陸士訓練学校のドタバタな日常

第5話 『パーティーゲームの友情破壊率は異常』

さて、所変わって第4陸士訓練校のグラウンド。

そこでは4人の男女……ハヤト達が、それぞれ自分のデバイスを構えて向き合っていた。

どうやらあのままの流れで、本気の喧嘩をすることになったようだ。しかもデバイスまで持ち出すあたり、4人の全力振りが伺えるというもの。決して大人気ないと思っではいけない。

「ふん、どうやら本気みてえだな。まあいいさ。

前々からお前らとは、一度ちゃんと肉体言語で話し合いをしなきゃと思っってたんだ」

「あら、奇遇ねハヤト。私も前から一度、アンタをきちんとぶちのめさなきゃって思ってたのよ」

「ゲームの恨みは恐ろしいのじゃ！ ボッコボコにしてやるからの！」

「俺も流石に今回ので結構色々溜まってたからなあ……たまには発散させてもらっぜ」

もはや4人は臨戦態勢、ちょっとした合図があれば今にも戦いが始まりそうな勢いだ。

ゲームひとつでココまで本気になれるのも、ある種の才能ではなからうか。

「ああもう、やめなよハヤトにルーク！ 流石にみつともないってば！」

「止めないでくれリオス！ これは俺のプライドが掛かった、大事な戦いなんだ！」

「そうだぜ、こればかりはいくら幼馴染のお前でも止められん！」

「ええ」

「ゆずとミコトも落ち着きなさいってば、ゲームくらいで熱くならないで」

「美卯は黙ってて！ 負けそうになったからコントローラーを抜くとか、そういう卑怯な手を使うのってホント許せないのよね、私」

「なにを言うか！ そっちも負けそうになったからと言って、電源を切ったではないか！

お互い様……いやむしろミコトの方が性質が悪いのじゃ……！」

その4人の間に立って、リオスと美卯が必死に止めようとするのだが、どうにも上手く行かない。元々ハヤトに対する鬱憤が溜まっていたせいもあり、説得は中々難しい。

ちなみに京谷はと言えば、既に説得は諦めているのか遠くの方でベンチに座りながら携帯端末を弄っている。側にはどこからか買ってきたジュースやらお菓子やらがあり、完全に観戦モードだ。

「手は一切抜かねえからなハヤト。いつぞやの桃鉄でキングボンビーを10連続でなすり付けていった恨み、今ココで晴らしてやる！フルボッコだ！」

「はっ！カードも使わずにトロトロやってるのが悪インだろうが！ゲームじゃ俺に勝てねエクセして、吼えてンじゃねエぞ三下がアッ！！」

「大体前から微妙に許せなかったのよ！私より身長低いくせに、何でアンタの胸の方が【規制】センチも大きいのよ！Dカップ！？ふざけるなー！」

「ヲホホホ！持たざる者の嫉妬は見苦しいのう！？悔しかったら、わらわと同じくらいの“ないすばでー”になつてから出直してくるんじゃないか！」

最早売り言葉に買い言葉。4人のボルテージは留まるところを知らずに上がっていく。

リオスと美卯も何とか止めようとしているが、既に2人の言葉はハヤト達の耳には届いていない。

それでも諦めずに止めようとする辺り、リオスと美卯がいかにも苦労性かが伺えるというモノだ。頑張れ2人とも、きっと未来は明るいぞ。

「うう、どうしよう山城さん。もう僕らじゃ止められそうにないよ」

「誰か教官がここに居てくれれば……」

「俺でよければ居るぞ？」

「「へ？」」

自分達では止められないと悟って嘆く2人の呟きに、背後から突然の声が返ってきた。

「よう」

「あわわわ、バルトさん！？」

「な、なんでココに！？」

聞こえた声に2人が驚きながら振り返ると、そこには跳ねた短い黒髪を撫で付けている壮年の男性がニヤニヤと笑って立っていた。彼の名前はバルト＝アルヴェン。

第4陸士訓練校の校長を務めており、豪放磊落な性格で訓練生達からの人気も高い。

「何でって、教官が訓練校に居るのは普通だろうがよ。まあ実際には仕事があったからなんだが、そんで来てみればなんか騒いでるから、気になって見に来たって訳だ」

「なるほど……でも助かりました。バルトさん、ハヤト達を止めてくれませんか？」

「何かゲームで白熱しすぎたみたいで……みつともないし、情けないですし」

天の助けと思えるタイミングで現れたバルトに、リオスと美卯が助けを求めてすがりつく。
確かにゲームが原因でリアルファイトというのはあまりにも情けない。

「ん？　どういう事だ、話が見えねえぞ？」

「実はかくかくしかじかで……」

「まるまるつまつま、って訳か。なるほど、ロックウエルの奴が見えたから、なんとなくそういう理由なんじゃねーかとは思ってたんだが……ホント情けねえな」

「返す言葉もありません」

リオスと美卯から事情を聞き、やれやれと大きな溜息を吐くバルト。

「ったく仕方ねーなあ。どれ、俺がちょっと言っただけやあ」

「お願いします!」

2人に頭を下げられ、仕方ないと言った表情で睨みあっている4人へとバルトが近づいていく。

その間にもハヤト達のボルテージは毎秒単位で上がっており、バルトが近づいた頃にはちょっとした刺激で爆発するような危険物的雰囲気さえ纏っていた。

「おうおう、物騒な雰囲気だなあお前ら」

「ガルルルル……」

「フシュー……」

「にゃー!」

「キシヤー!」

「動物かよ、とりあえず俺の話を聞けって」

すでに言葉すら発することなく鳴き声で威嚇しあう4人に苦笑し、

バルトが口を開く。

その光景を見て、リオスと美卯はようやくこのくだらな過ぎる騒動にも終止符が打たれる、そう思って安堵の笑みを漏らした。

しかし、ただ1人この状況を遠くから見守っていた京谷だけは、違う感想を口にする。

「……絶対ややこしい事になるよな、これ」

自分で買ってきた飲み物やお菓子を口にしながら、楽しくなってきたと呟く京谷。

そして京谷の言うとおり、バルトは決して『ハヤト達を止める為』に近づいた訳ではなかった。

前述したとおり、バルトは訓練生達からの人気が高い。ただし、それは何も彼の性格だけが理由ではないのだ。

「なにはともあれ、まずはお前ら落ち着けよ。事情を聞いたから気持ちちはわかる。」

でもよお、そんなことしたって何も変わらねーぜ？ 少しは冷静になれよ。いいか？ そうやっていがみ合っているのも何も始まることはねえんだ。

とりあえず、俺が何を言いたいのかというと……」

彼の人気が高い理由、それは――。

「ラウンド1！ ファイツー！！」

「えええええつつ!?」

——異常なまでにノリがいいから、だったりする。

「見敵必殺うううつつ!」

「わらわのこの手が真っ赤に燃えるううう!!」

「私が! 私達が! ガンダムだ!!」

「気持ちだけで……一体何が守れるって言っただっ!!」

バルトの合図と共に、ハヤト達全員が一斉にお互いに向かって全力の攻撃を放つ。

ある者は砲撃で、またある者は斬撃で。思い思いに自分が持つ最強の技を、憎いあんちくしょう目掛けて一切の遠慮なくぶつ放した。直後、お互いに放った技がぶつかり合い、グラウンドに大きな爆発音が響く。

「何やってんですかバルトさああんつつ!?」

「い、いいから退避するよりオス! ハヤトはともかく、あとの3人の全力に巻き込まれたらちよつと洒落にならないから!!」

こんな状況でも律儀にツッコむリオスを引っぱりながら、美卯が全力で爆発が起きている被害圏内から退避し、京谷が座っているベンチまで戻ってくる。

「お疲れ。やっぱこうなったか」

「きよ、京谷、こうなるって分かってたなら、もっと早くに止めてくれたって……」

「いやいや無理だって。バルト校長が見えた時点で絡んでくるのは分かってたし、そうなたら絶対に俺じゃ止められねーよ。クラス委員とかの集まりでも、絶対に誰も止められねーもん」

カラカラと笑う京谷にリオスが抗議するも、京谷は苦笑しながら肩を竦めるだけだ。

彼の言うとおり、京谷はクラス委員の仕事などでバルトに接する機会が多く、その度に色々と騒動に巻き込まれたりしているのだ。だからまあ、今回こうなるのも想定の範囲内だったのだろう。

「あの人、こういうトラブルとか結構好きだからなあ」

「あ、そういうば聞いたことあるわね。バルト教官って基本的には真面目なんだけど、こういう場面だとももの凄く悪ノリするって」

「そういう事だ。まあ見てる分には面白いし、いいんじゃないか？ どうせ後で怒られるのもハヤト達だけになるだろうしさ」

「問題の論点がズレてると思うけど……あれ？　そういえばバルト校長は？」

そこまで話したところで、この騒ぎの合図となった人物——つまりバルトがこの場に居ない事にリオスが気付き、辺りを見回した。しかしどれだけ見回しても、リオス達の近くにバルトの姿は無い。どこに行ったのかとリオスと美卯がキョロキョロ周りを探していると、笑いをかみ殺した京谷が「あっちあっち」と爆発が起きているグラウンドを指差す。

「「！？」」

そちらを向いた2人が見たのは、ボロボロになってグラウンドに倒れているバルトだった。

どうやら先ほどの爆発に巻き込まれてしまったらしい。

「真っ先に爆発に巻き込まれてあの状態になってたな。いやぁ酷い酷い」

「自分で煽っておいて真っ先に巻き込まれるって……」

「何そのやるせない結末……あれ？　何か涙出てきた」

あんまりと言えばあんまりなバルトの結末に、思わず涙する美卯とリオス。

もつともバルト自身はボロボロな見た目に反して実際ダメージは大したこともなく、倒れているのもなんとなく空気を讀んだからだったりするのだが。

「焚きつけた文句を言おうとしたのに、あんな状態じゃ何もいえないじゃない……」

「案外それが目的だったのかもな」

「バルトさん……作戦だとしても、わざわざそんな作戦選ばなくてもいいのに」

「いやー、どうせならひよっ子どもの成長具合も体で確かめてみようと思っただけ」

「……っ!?」

呆れた声でリオス達が呟く瞬間、3人の隣からグラウンドで倒れていた筈のバルトの声がした。

驚いた3人がそちらを向くと、そこには先ほどまでボロボロになつて倒れていた筈のバルトが、もはや喧嘩などという生易しい言葉では語れない惨状になっているグラウンドを見て、ニヤリと不敵な笑いを浮かべながら腕を組んで頷いている。

「バ、バルトさん!? 大丈夫なんですか!？」

「ああん? お前らひよっ子どもの攻撃なんぞ、どんだけ喰らって

も痛くも痒くもねえよ」

「でも、さっきはボロボロになってたような……？」

「ネタだよネタ。お前らのリアクションも見れたし、満足したからやめただけだ」

「は、はあ……。でも、それをやる前にちゃんと止めて欲しかったです」

「むしろ焚き付けちゃったし……」

がつくりと肩を落として溜息を吐くりオスと美卯。だが、バルトはそんな2人の言葉を聞くと、いきなり真剣な顔になり、声を低くして口を開く。

「いいか、コーネルドに山城。不満ってヤツは、ぶちまけりやいいってモンじゃねえが、溜め込みすぎればいつか必ずどっかで爆発しちゃうもんだ。そうなる前に、こっやってちよくちよくガス抜きしてやるってのは、意外と大事なんだぜ？」

「バルトさん……」

「部隊で一緒に仕事してればな、こっいうくだらねえ理由が原因の喧嘩なんざしょっちゅうだ。」

俺もまあ、確かにちよいと悪ノリしちゃったけど、こっいうのも覚えという損はないぞ」

「そう言われてみれば、確かに……」

「すみません、私たちバルト教官を誤解してました。
てつきり、見ていて楽しいからやってるんだとばかり……」

真剣な面持ちで諭すバルトに、リオスと美卯は尊敬の眼差しを向けて目を輝かせる。

一見面白がってやっていたとしか思えない行動に、自分たちでは及びもつかない深い考え……しかも教官の鑑としか思えない理由があったのだから、当然かも知れない。

「いや、確かに楽しいからってのもあるんだけどな」

「「台無しだー……っ!?!」」

まあ、直後にバルトが漏らした言葉で、文字通り台無しになってしまったのだが。

「だってお前、こんな馬鹿騒ぎをあつさり収める手はねえだろ？
やっぱ騒げる時には騒いでおかねえとな!」

「だとしても、そういう本音は隠しておきましょうよおっ!」

「馬鹿野郎! 自分の生徒相手に隠し事なんて出来るか!」

「こんな場面じゃなければ、素直に感動できる台詞なのに……」

「さっきまでのギャップと相まって、駄目人間のいい訳にしか聞こえない……うう」

豪快に笑いながら教官としての威厳をどんどん削っていくバルト。そんな彼を見て、リオスと美卯はさっきとは別の意味で、ポロポロと涙を零すのだった。

さて、一方その頃京谷はと言うと。

（あー、ツツコミ役が他に居ると楽だわー。あ、ハヤトが3人の同時攻撃を受けて吹っ飛んだ。

アレは入院コースだなー……まあ、アイツ回復力は人間やめてるから、1時間もすれば普通に回復するんだるうけどさ。とりあえずあのまま巻き込まれると大変だし、回収しといてやるか）

カオスになっていく自分の隣と、戦場の様相を為していくグラウンドとを交互に見やりながら、自分で買ってきたお菓子を食べつつのんびり観戦と洒落込んでいた。

一応フォローなどをするあたり、ちゃんと心配はしているようだ。

ちなみに今回起きた喧嘩の最終的な勝者はルーク。

ハヤトは真っ先に吹っ飛ばされて脱落。その後、ゆずとミコトは持つ者と持たざる者、決して相容れない人種同士の激しい戦いの結

果ダブルKOとなった結果である。

その後、バルトも含めて全員が怒られたのは言うまでもない。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語……じゃなくていいやもう。

・今回のおまけ

【バルトとハヤトとルーク】

ハ「こーちよー！ 左教官に追われてるんで、ちよいと匿ってくだ
せえ！」

ル「こっちには誰も来なかったって言うだけでいいんで！」

バ「ああ？ どうせまた何かやったんだろ。ちゃんと怒られてこい
よ」

ハ「そんな事言わずに助けて！」

ル「ポツチーあげますから！」

バ「左ー！ ここにロックウェルとリーゼンベルグがいるぞー！」

ハ&ル「ちくしょー！ 裏切りものー！」

バ「いや、教官として普通のことだろ」

【ゆずとミコト】

ミ「ねえゆず、どうやってたらそんな聞き分けの無い大きさになる訳
？」

ゆ「んみゆ？ よく食べてよく眠る。それが一番じゃな。それ以外
は何もしておらぬぞ！」

ミ「……チツ、頼りにならないロリババアだわ」

ゆ「ババアって言うにゃーっ！！」

【リオスと美卯と京谷】

リ「うう、今日も僕ツツコミばかりだった……」

美「ど、どんまいだよリオス。きっと明日はいいことあるって！」

リ「……そうだね。山城さん！ これからも同じツツコミ役として頑張ろうね！」

美「あ、私ツツコミ役は勘弁して欲しいな……なんて思っただけだ」

リ「（・ω・）＜酷い裏切りを見た」

京「まあリオスが居るかぎり、俺と美卯はツツコミやらなくていいから助かるしな」

リ「京谷まで酷いつ！？」

第5話 『パーティーゲームの友情破壊率は異常』（後書き）

桃鉄、スマブラ、人生ゲーム、ドカポンでの友情破壊率は異常。メーカーが狙って作っているとは思えない。
どうも、ラモンです。

今回は新キャラが1人しか出せませんでした……本当は、今回でまだ出せていない人たちを全員出すつもりだったのに……（汗）
それはともかく、今回初登場だったのは、男性教員枠で第4陸士訓練校の校長をやってもらう、バルト＝アルヴェンさんでした。

本当は、もっと頼れるナイスガイなのですが、ノリで書いていたらからかうのが大好きなおじ様に……。ジャンヌさん、問題ありそうでしたらすぐにお知らせください。書き直しますです。

さて。次回では今度こそ、まだ出せていない応募キャラの皆さんを全員出したいところです。そしてキャラ紹介を書いて、それからが本番……という感じですので、早いところ書きたいですね。

それではまた、次の話で。

自分のキャラの扱いに納得いかない場合、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。出来る限り修正します。

第6話 『学園のマドンナって、ゲームの中だけの存在だよね』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

「ちーっす」

「こんにちはー！」

一日の訓練が全て終わった後——つまり放課後。

訓練校で放課後は使われない教室のひとつの扉を開き、ハヤトとソフィアの2人が教室の中へと入ってくる。2人の挨拶に、教室の

中で自分の手元に視線を落としていた人物が、ドアの方へと視線を上げる。

「おー、お前らか」

女性と見紛う程に長い紫銀の髪を揺らし、髪と同じ紫色の瞳で2人を見て声を上げたのは、ハヤト達の1年先輩である少年、ヴィレイサーⅡセウリオン。

やや気だるげな目で自分達を見つめるヴィレイサーの姿を見て、ハヤトとソフィアは感心したような顔で口を開いた。

「セウリオン先輩、相変わらずはええッスね」

「ねー。私もハヤトも、授業終わるのと殆ど同時に来たのに」

「あ？ あー、そりや当然だろ。お前らよりも俺の方がここに近いんだし」

ヴィレイサー達の教室はこの教室の斜め前。対してハヤト達の教室はひとつ下の階。

同時にスタートしたとして、どう頑張っても2人がヴィレイサーより先にこの教室にたどり着くのは、それこそ超能力でも使わない限り不可能だろう。

「つーか前にも説明したと思うんだが」

「いやあ、俺ってどうでもいい事は3秒で忘れる人なもんで」

「私も結構忘れっぽいんですよ」

「そうかい。まあ、どうでもいいさ」

似たような仕草で頭を掻くハヤトとソフィアに肩を竦め、ヴィレイサーは再び視線を手元に落とす。

それを見て、2人は自分の荷物を適当な席に置き、それぞれ鞆の中からBSPを取り出し、ヴィレイサーの近くの席へと座って楽しそうに声を掛けた。

「先輩先輩、何やってるんですか？ 良かったら、私と一緒に桃鉄やりませんか？」

「いやいや先輩、俺と一緒にモンハンか神喰やろうぜ！」

「どっちもやらねえよ、めんどくせえ」

「「えー！」」

手元のBSPを操作しながら、ヴィレイサーはハヤト達の誘いを短く断る。

断られたハヤトとソフィアが抗議の声を上げるが、取り合おうともしない。

「いいじゃないですか、一緒に遊んでくださいよヴィレイサーせんぱい」

「そうだそうだー！ 後輩いじめは良くないぞー！」

「「あーそーべー！ あーそーべー！」」

「……ガキかお前らは」

声を揃えて遊ベコールをしてくる2人に、ヴィレイサーは深々と溜息を吐いた。

まだ14歳、しかも可愛い女の子であるソフィアはともかく、16歳の男のハヤトが遊ベコールをするのは見苦しくて仕方ない。死ねばいいんじゃないかな。

しかし、暫くやってもヴィレイサーが反応しないのを確認すると、これ以上騒いでも仕方ないと思ったらしく、2人揃って口を尖らせながらそれぞれ席に座る。

「ちえー。それじゃあ仕方ないから……ハヤト！ モンハンで対戦しよー！」

「おうよ、仕方ないから俺っていうのが悲しいけど気にしない！ さあ、かかってこんかい！」

「私ランスね」

「カウンター専門の待ちプレイですね、わかります。俺は双剣で行

くかね」

「防御？　なにそれ美味しいの？　的な脳筋プレイですね、わかります」

「当たらなければどうという事はない！」

「私にも敵は見えるんだよ！」

さっきまでヴィレイサーに遊ベコールをしていた割に、あっさりと自分達だけで遊び始めるソフィアとハヤト……とは言っても、この2人がヴィレイサーに遊んで欲しいとねだるのも、それをヴィレイサーが断るのも、この3人の間では日常茶飯事なので特に気にしない。

さて。ここまで読んだ人の中には、この3人がどういう関係なのか気になった人もいるだろう。

実は……と言う程でもないが、この訓練校にも『部活』はある。ハヤト、ソフィア、ヴィレイサーの3人は数ある部活の中の『ゲーム部』に所属しているのだ。

他の部員はユウキにリオスなど、結構な人数がいたりする。ちなみに部長はヴィレイサー。

ゲーム部を作ったのはハヤトだが、信用問題云々でヴィレイサーが部長という事になった。

何でも、ゲーム部に所属する全員が「ハヤトはあり得ない」と声を揃えたらしい。泣ける。

「そついや、今日はユウキ達はどつしたんだ？」

「あいつ等なら、ゲーセンに行くって言ってましたね」

「私とハヤトは新作のゲームを買っちゃってお金ないから、今日はいけなかったんですよ」

「なるほどな……少しは計画的に使えよお前ら」

「ついカツとなって買った」

「でも、後悔も反省もしてません！」

ドヤ顔で高らかに宣言するハヤトとソフィアに、ヴィレイサーはやれやれと肩を竦めるのだった。

「よし、それじゃあ勝負だよハヤト！ 今日こそかーっ！」

「来いよベネット！ 銃なんか捨ててかかってこい！」

「ベネットって誰だよ。つかモンハン武器捨てられねえし、銃もねえから」

● 陸士訓練学校のドタバタな日常。

第6話 『学園のマドンナって、ゲームの中だけの存在だよね』

「ふっ、甘いぜソフィア！」

「にやつ！？ 何でそれ避けれるの！？」

「素人とは違うのだよ！ 素人とは！！」

「お前らうつせーよ。もう少し静かに…… あん？」

3人がこの教室に揃ってから暫く時間が経った頃、不意に教室のドアがノックされた。

聞こえた音にヴィレイサーが視線を上げると、ドアの向こうに人の影が見える。ノックされた時点で当たり前なのだが、どうやら誰かが来たらしい。

「お、誰か来たみたいだな」

「みたいッスね……うお！？ 俺の鬼人乱舞を防ぐとか、やるじゃねえかソフィア！」

「ふっふっ、私だって日々進化してるんだもん！ 男子三日会わざれば何とやらだよ！」

「お前女子だろ」

「こまけえことはいいんだよ！」

けれど、3人は誰もドアを開けに行こうとしない。

絶賛ゲーム中のハヤトとソフィアはともかく、一度視線を上げたヴィレイサーも、まあいいかともう一度視線を落としてゲームを再開し始めた。何故誰も動かないのか。

そして、少しの間を置いた後でもう一度ドアがノックされる。

「おい、ハヤト行けよ」

「いや今プライドを賭けた勝負の真っ最中なんで。ソフィア行けつて」

「いやーですー。ここで動いたら負けちゃうじゃん！

1人プレイしてるんだから、ヴィレイサー先輩が行ってくださいよう」

「ヤだよ面倒くせえ」

3人が座っている場所からドアまでは1メートル弱。その程度の距離を歩いてドアを開ける、その程度の行動を嫌がって互いに押し付けあうハヤト達。そうやって居る間に動けばいいのに。

「もういい、このままじゃラチがあかねえ」

「ですね。じゃあ、ここはひとつゲーム部らしくゲームで決めましようや」

「負けた人が出るんだね？ 負けないよ〜！」

「面倒だけど、まあいいぜ。かかってこいよ後輩ども」

ドアから響くノックの音を無視して盛り上がるハヤト達だったが、ノックをしている人物からすれば、いつまで経ってもドアを開けてもらえないどころか、完全に放置プレイ。

よほど精神的に大人な人でも、キレたところで文句は言われない状況だ。

「……すまないが、勝手に入らせてもらっぞ」

しかし、この時ノックをしていた人物の大人っぷりは半端ではなかった。

明らかにキレてもおかしくないこの状況で、語気ひとつ荒げることなく静かにドアを開き、一言断りを入れるほどの余裕さえ見せないから、その人物は教室の中へと入ってくる。

「にゃ？ あ、セイ先輩だ〜っ！」

「何だと！？ この訓練校の女子の中でトップの成績を誇り、眉目秀麗成績優秀スポーツ万能スタイル抜群と4拍子揃った完璧美人に

して、訓練校に通う女子の憧れの的であり、非公式ではあるがファンクラブさえ存在しているセイ「カルナード先輩か!？」

「なんでそんな説明台詞なんだよ」

「仕様です」

「そうか、仕様ならしかたないな」

教室へと入ってきたのは、ややウェーブの掛かったくすんだ、肩にかかる程度の長さをした桃色の髪を揺らし、キレ長な青い瞳が特徴的な少女。

ハヤトの説明台詞でお分かりの通り、彼女の名前はセイ「カルナード」。

ヴィレイサーの同期で、ハヤト達からすると先輩になる。

「セイせんぱーいつ!」

「おっと」

セイの事を認識した途端、ソフィアはBSPを机の上に置いて、彼女に駆け寄って勢いそのままに抱きついた。とはいえ結構な勢いがついていたのでタツクルに近かったかも知れないが。

けれどセイはそんな風に勢いをつけて飛びついてきたソフィアを、よろめく事無く受け止めた。

「こら、ソフィア。飛びつくのは危ないと、前にも言っただろう?」

「ふふふ。先輩のおっぱいが柔らかくてきもちーからいけないんですよ」

「訳がわからんぞ、というかセクハラだ」

自分の豊満な胸に顔を擦り付けてご満悦なソフィアの言い分に、セイは苦笑を漏らす。

本当ならもう少し色々と注意しなければいけないのだが、こうして懷かれてしまうと弱いのだろう。

「クール系巨乳美女×ロリ巨乳美少女……これは冬に薄い本が出るな!」

「……ハヤト、お前はホントブレねえな」

「巨乳が嫌いな男子なんていません! セウリオン先輩だって好きでしょ!?!」

「こつち振んなようぜえ。つーかお前そのうちマジで殴られるぞ」

「それはそれで!」

「うわぁ……ないわー」

一方ハヤトは抱きついていいるソフィアと、抱き疲れているセイを

見て大興奮。本人達を前にしてセクハラ発言をして、隣に居るヴィレイサーに呆れられている。

とまあそんな感じのやりとりをした後、ヴィレイサーがハヤトから視線をセイに移し、口を開く。

「ところで、何か用事か？ お前がこの部に来るとか珍しい」

「ん？ いやなに、君にちょっと用事があってな」

「俺に？」

「ああ」

首を傾げるヴィレイサーに頷きを返して、セイは自分の鞆から1冊の教本を取り出した。

それはついさっきまでヴィレイサーとセイが受けていた座学の教本で、『マリーナせんせーと学ぶ、ドキドキ 集束魔法応用編！』というタイトルが印刷されている。

なんだこれ。

なんだこれ。

「どうやらさっきの座学が終わった後、君の教本を間違って持ってきてしまったらしくてな。

帰る準備をしている際に気付いたので、こうして届けに来たんだ」

「そつなのか？ 別に俺の机にでも置いときゃいいのに」

「何を言う。教本は毎日ちゃんと持ち帰り、その日の復習をするのが基本だろうが」

当然の事を聞くなとばかりに、心底不思議そうな顔をして首を傾げるセイ。

ぶっちゃけそこまで真面目な事をしている人間は、この訓練校の中でも数える程しかないのだが、まあだからこそ彼女は訓練校でトップクラスなのだろう。

ちなみに最底辺の人間はと言うと。

「偉いッスね、カルナード先輩。俺教本とかもうどこいったか分かんねーッスよ？」

このような有様だ。

ちなみにハヤトの座学の成績は下から数えて片手で足りる上、教官全員から「コイツ本当に進級可能なのか……仮に進級したとして、管理局に入れるんだろうか？」と本気で心配されるレベルである。

しかし追試でいい点を取るあたり、狙って追試を受けているのかもしれないけれど。

「……貴様はもう少し頑張れ。毎回最下位争いをしているのを、少しは恥ずかしく思っただろうだ」

「ゲームとエロこそ我が人生！そこに一切の後悔は無い！！！！」

「貴様は本当にダメだな……ヴィレイサー、同じ部の先輩として何

とかしろ」

「いや無理。つかめんどい」

ドヤ顔でサムズアップするハヤトに、呆れきった表情でセイがヴィレイサーを振り返る。

だが、ヴィレイサーはもう既に諦めているので彼女の要請を一刀両断。右手をひらひらと振って拒否してみせた。

「君はいつもそうだな。まったく……」

「大丈夫ですよ、セイ先輩。今回のテストは、絶対にいい点数を取らせるんだ！ ってティアナとか成績が良い皆で張り切っていましたから！」

「ふむ。確か君のクラスには成績優秀な人間が大勢居たな……ならば安心、か？」

「私も一緒にハヤトに勉強教えてあげますから大丈夫です！ 多分！ きつと！ そうだといいな！ 奇跡が起これば何とか！」

「どっちなんだ……やれやれ、仕方ない。何か困った事があれば私に言え。」

出来る範囲で、にはなるが手伝ってあげるから」

「やったあ！ だからセイ先輩大好きです〜！」

胸を張って自信満々に後ろ向きな発言をするソフィアの頭を撫で、苦笑するセイ。

座学の試験が近くなれば彼女も忙しいだろうに、それでもこうやって後輩の面倒を見てやれるのが、彼女が男女問わずに人気がある理由なのかもしれない。

「さて、それはともかく教本を返すぞヴィレイサー」

「あいよ。そこらへんに適当に置いてくれ。後で回収しとくわ」

「うむ。ではそうさせて貰おう」

相も変わらず適当な返事をしたヴィレイサーの言葉に頷き、セイは自分の持っていた教本を近くの机に置いて満足そうにもう一度頷いた。

「これでよし、と。それでは私はこれで帰らせてもらおうでしょうか。ヴィレイサー、ソフィア、またな」

「ああ、またな」

「先輩さようならー」

「カルナード先輩、また来てくださいねー」

用事を済ませたセイは、最後にもう一度ソフィアの頭を撫でて教

室から出て行く。

にこやかにそれを見送ったハヤト達だったが、彼女の姿がドアの向こうに消えた後に、ハヤトはある事実に気付いた。

「あれ？ 俺いま名前呼ばれてなかったんじゃない？」

「呼ばれてなかったね」

「確かに呼ばれてなかったな」

「何で？ 俺ってカルナード先輩に嫌われてたっけ？」

首を傾げて不思議がるハヤト。

そんなハヤトを見ながら、ソフィアとヴィレイサーは一度お互いの顔を見てから溜息を吐く。

「そりやなあ……」

「セイ先輩って、五月蠅い人とか不真面目な人って嫌いなんだよ、ハヤト」

「はあ！？ 俺とか超もの静かで真面目っ子じゃん！」

「それは無いよ」

「お前、少し前の自分の行動と発言すら覚えてねえのか」

必死になつて真面目だとアピールするものの、ついさっきの発言やら行動やらを省みてみれば、その主張が図々しいモノであるかはお分かり頂けるだろう。

あれだけ騒いだ挙句に、座学では毎度最下位争いをしている男が真面目とか冗談でも笑えない。

「ちくしょう！ そんな2人してツツコミしなくてもいいじゃない！」

「ハヤトが変なこと言つのが悪いんだよ」

「そうだな。お前がトチ狂つた発言しなきゃ、俺達だってツツコミ入れねえっての」

「ねえ、ソフィアもセウリオン先輩も俺のこと嫌い？」

「嫌いじゃないが、時々ウザい」

「嫌いじゃないけど、ちょっと自重して欲しい」

「（ＴωＴ）ブワッ」

身も蓋も無い2人の発言に泣きそうになるハヤトだったが、事実なのだから仕方がない。

そんな感じでソフィア達がハヤトを弄って遊んでいると、教室のドアが再びノックされる音が響く。

「あれ？　また誰か来たみたいですね」

「千客万来だな……開いてるんで、勝手にどうぞー」

ドアに向かってヴィレイサーが声を掛けると、「失礼します」と控えめな言葉と共にドアを開けて1人の男性が入ってきた。

入ってきたその男性を見て、ソフィアは少しだけ驚いた顔をしてその人物の名前を呼んだ。

「わ、ネコ先生だ」

「こんにちは、ジュリーストンさん」

自分より年下のソフィアに向かって丁寧に頭を下げたこの男性は、コタロウ「カギネ」。

第4陸士訓練校の教官で、主に座学を担当している。濡れた烏の羽のような黒い髪と、寝ぼけているように見える黒い瞳、そして肩から先を失っている左腕が印象的な男性だ。

「どうしたんですか？　ネコ先生がゲーム部に来るなんて珍しいですねっ」

「はい。少々ロククウェルさんに聞きたい事がありましたたので、お伺い致しました」

嬉しそうに微笑むソフィアに、コタロウも微笑を返しながら答えた。

ちなみにソフィアがコタロウを呼ぶ『ネコ先生』というのは彼の愛称で、彼と親しい人間は大半が彼をこう呼んでいる。彼が教える座学はわかりやすく、コタロウの座学を受ければ執務官試験突破も夢じゃないと噂される程だ。

それだけでなく、コタロウはある一点に置いてこの訓練校の中でも一目置かれている。

何故彼が一目置かれるのか。それは――

「お、俺ツスカ!？」

「はい。ロックウェルさんにです」

――この訓練校で唯一彼の授業だけは、ハヤトが真面目に受けているからなのだ。

サボリ居眠り早退と、こと授業に対する不真面目さならピカイチのハヤトが、コタロウの授業だけは欠片もサボる事無く真面目に取り組み、そのうえ成績まで良い……と言えば、彼の凄さがわかってくれるだろうか？

「何ですかね？ 俺ちゃんと課題は出しましたよ？ 今日の座学だって真面目にやりましたし」

「ええ、それはそうなのですが……その課題で少しばかり質問した

「事が」

「質問……ッスか？」

恐る恐る、という感じでハヤトが聞き返せば、コタロウは頷いて自分の手に持っていた一枚の紙をハヤトに見せ、そこ書かれていた文章の一箇所を指差してみせる。

「この所々に含まれている『（。）。』。おっぱい！おっぱい！』という記号は、何なのでしょうか？」

『おっぱい』というのが女性の胸を指しているのは分かります。

ただ、それが今回の『効率の良い魔法集束に関する推論』という課題のテーマにどう関係してくるのかが分かりませんでしたから、こうして質問をしてお伺いした次第です。それで、どういう意味なのでしょう？」

「は？ 俺そんなのカギネ教官の課題に書いたつもり……あ」

コタロウの質問に首を傾げたハヤトだが、コタロウが指差す紙を見て濁った声を上げた。

それは間違いなく昨日ハヤトが仕上げた課題で、『（。）。』。おっぱい！おっぱい！』という落書きは、丁度同じ日に提出予定だった舞の課題に書く予定だった悪戯なのだ。

——どうやら、間違つてコタロウに提出する課題に書いてしまったらしい。馬鹿だコイツ。

「えつとあのその……すんません」

「？ 何故謝るのですか？ このように課題として提出された文章の中に何度も出てくる以上、何かしらこの課題のテーマに深く関係してくるのでしょうか？」

でしたら、それがどういう意味を表しているのかを理解できなければ、私も正当な評価を下すことは出来ません。これを理解せずに評価するのは申し訳ありませんからね」

「えーと……」

「せっかくハヤトさんが提出してくださった課題なのですから、正当な評価が出来なくては申し訳ありません。ですから、この『（。°。）〇ミ。おっぱい！おっぱい！』がどう関係しているのか、それを説明してくれませんか？」

「いや、ですからその……勘弁してください」

語氣も荒げず、特に責めるような声色さえ無く、心底不思議そうな表情で顎に手を当て、首を傾げてハヤトに質問するコタロウ。

ハヤトが彼の座学をキチンと真面目に受ける理由、それがこの怖いくらいに真面目な彼の性格ゆえなのだ。ちなみに嫌味に聞こえるかもしれないが、さっきの彼の言葉に他意は一切無い。

ただ純粹に、ハヤトが何故『（。。）〇ミ。おっぱい！おっぱい！』と課題に書いたのかを疑問に思い、それが自分が出した課題のテーマにどう関係してくるのか、それを知りたいと思っているのだ。

「あーあー、何やってんだかあの馬鹿は」

「にやはは、多分ハヤトってば舞せんせーの課題とかと間違えちゃったんでしょね」

「カギネ教官は悪意なんて欠片も無いから、余計に困るんだよなあ……」

「ですねー……とは言っても、変な事しなきゃ平気だから、私はネコ先生大好きですけど」

コタロウに尋ねられてたじたじになっているハヤトを見ながら、ヴィレイサーとソフィアは苦笑いを漏らした。実際、ソフィアなどの真面目な生徒からすれば、単純に座学の教え方の上手い素晴らしい先生なのだから、ハヤトが彼を苦手としているのは理解できないだろう。

だって不真面目にしてる方が悪いんだし。

「ふむ……。もしかして、女性の胸が魔力の集束効率に大きく関係してくる、という事ですか？」

「そういう訳じゃなくて、書き間違い一つかなんつか……」

「？」

「ホント、謝りますから勘弁してください……トホホ」

こうしてハヤトは、その後1時間に渡って『（。　。　。）〇ミ。おっばい！おっばい！』は、舞の課題にする予定だった落書きだという事をコタロウに説明する羽目になったのだった。

そしてハヤトの説明にコタロウが納得して帰っていったあと、ハヤトは「お疲れ」と自分の肩を叩くソフィアに、心の底から疲れた表情でこう告げたという。

「俺、明日から真面目に生きるわ」

それが実行されたかどうかは、想像に難くない。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語……だった筈なのになあ。

・今回のおまけ

【セイとソフィア】

ソ「ねえねえ先輩？」

セ「ん？ どうした、ソフィア」

ソ「先輩って、他の訓練校に彼氏さんが居るんですね？」

セ「あ、ああ。そうだな」

ソ「……なるほど、だからおっぱい大きいんですね！」

セ「はあ！？」

ソ「だって、揉んで貰うと大きくなるってハヤトが……」

セ「ちょっと奴に電気ウナギの気分を味わわせて来る」

【ハヤトとコタロウ】

ハ「うう、酷い目にあつた……落書きつて説明するだけで、あんなに時間掛かるとか……」

コ「ロックウエルさん、少し気になった事が」

ハ「へえあ！？ な、なな何でしょう！？」

コ「先ほどの課題に書かれていた『。。。』。おっぱい！おっぱい！」とは、どの位の大きさをした胸を指しているのでしょうか？」

ハ「どのくらいでもいいんで、勘弁してください！」

【ハヤトとソフィアとヴィレイサー】

ハ「しかし先輩って、いつも部室に居ますよね」

ソ「お友達と遊びに行ったりしないんですかー？」

ヴィ「あー、街中まで移動するの面倒だから断ってる。たまに行くけど」

ハ「さすが面倒臭がりの筆頭、セウリオン先輩だ！」

ソ「それでこそ先輩ですね！」

ヴィ「どういう意味だぶっ飛ばすぞ」

第6話 『学園のマドンナって、ゲームの中だけの存在だよ』(後書き)

コタロウ先生は、生徒思いの凄く良い人。

ただ、不真面目なハヤト達からすると、凄く苦手な先生。
どうも、ラモンです。

今回でようやく応募してもらったキャラクターを全員登場させる事が出来ました。

個人的にコタロウさんが今回上手く動かせなかったのも、そこが心残りですね……凄く真面目な人なのに、何か嫌味っぽい人みたくなってしまった(汗) sternさん、力不足で申し訳ないです。鮮血の刻印さんと飛鳥さんも、何か問題がありましたらすぐにご連絡ください。すぐに修正などしますので。

さて、いよいよ登場人物も全員登場し終わりましたので、早いうちに『登場人物紹介・その2』を書きたいと思います。

今回は上級生枠、教官枠の皆さんになりますね。

そして次回は……多分授業風景あたりになると思いますが、どうなるかはその時のノリ任せなのでわかりません！(笑)

それではまた、次の話で。

応募して頂いたキャラクターの扱い、設定などで問題や間違いがありましたら、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。
出来る限り修正します。

第7話 『。。。』。おっばい！おっばい！』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

「……揃ったようだな、諸君」

まだ殆どの訓練生が登校していない、早朝の訓練校。

時間で言うなら午前5時という、呆れるくらいの早朝に、ハヤト、ルーク、リオス、京谷、ユウキ、アルトリア、そしてアウルの7人はそこにいた。

彼等は自分達の机を円状に繋げ、円卓を作ってそれぞれ腰掛けている。

その上座に座あるハヤトが、某工。アのグラスン司令官と同じポーズをしながらその場に居る全員を見回して口火を切った。

「揃ったも何も、てめえが無理矢理起こして連れてきたんだろうが」

「んにゅ……眠い……」

キリツという効果音が聞こえてきそうなドヤ顔のハヤトに対し、京谷はイラついた声で答え、アルトリアは寝ぼけ眼をゴシゴシ擦っている。とても可愛らしい。

「で、何で僕達を呼んだの？」

「ちゃんと納得のいく説明を要求します」

同じようにやや寝ぼけた顔のリオスとアウルも、あくびを噛み殺しながらハヤトに尋ねる。

「それについては！」

「俺達から説明させてもらおうか！」

その問いに勢いよく立ち上がって答えたのは、ハヤトではなく、彼の両隣に陣取っていたルークとユウキ。2人は立ち上がった勢い

そのまま、無駄に元気な声で2人は高らかに声を上げる。
もはやテンションは天元突破。後でうるさいと怒られようとお構いなしだ。」

「今日集まって貰ったのは他でもない！」

「昨日の夜、俺達は徹夜で“ある事”について語りあっていた！」

「そして今朝になって、どうせなら他の奴等の意見も聞いてみよう
と思った訳だ！」

「……ねえ京谷どうしよう。僕もう嫌な予感しか感じないんだけど」

「安心しろリオス。俺もだ」

京谷とリオスが諦めきった顔で言葉を交わすも、それはハヤト達の
の耳には届かない。

いや、まあ仮に声が届いたとしてもハヤト達は聞く耳持たなかった
だろうが。

盛り上がったお馬鹿達は、止めようとするだけ無駄なのだから。

「さて、君達も疑問に思っただろう俺達が徹夜で語り合っていた“
ある事”！」

「それは……！」

「「女の子達のおっぱいについてだ……！！！！！！」」

スーパー戦隊よろしく決めポーズを取り、決まった……と悦に浸る2人。

だが、勿論リオス達はそのを見て感動も感慨も抱かない。抱くのは――

「……馬鹿だ馬鹿だとは思ってたけど、ここまでだったとは」

「屋上へ行こうぜ。久しぶりに……キレちまったよ……」

「ハヤトさん、ルークさん、ユウキさん。貴方達はいいいクラスメイトだったのに、残念です。」

まさかこんな形でお別れすることになるなんて……」

「死刑でいいよね？ 答えは聞いてないけど」

――そんな理由で朝っぱらから呼び出したんかい、という怒りだけだ。

「はあ！？ 何なのお前ら、そのうつつつすいりアクションは！？」

「おっぱいだぞ！？ 人類の夢と希望と浪漫と愛が詰まってる夢の膨らみだぞ！？」

「それに反応しないとか何なの！？ 馬鹿なの！？ 死ぬの！？」

「むしろ俺らがぶっ飛ばしてやろうか！？ ああん！？」

しかし今回はルークとユウキも引き下がらない。4人の怒気を真つ向から受け止め、それどころか思いつきり威嚇しかえしている。エロの力は偉大だ。

「……よせ、ユウキ、ルーク」

そんなテンション天元突破状態の2人を、ハヤトが冷静な声で引き止める。

ポーズは相変わらず某司令のままだが、その目には確かに理性の光があつた。いや、こんな状況で理性の光とか言っても、全然カッコよく無いのは分かってるけども。

「司令！？」

「しかし、こいつらは……！」

「彼等はまだ、おっぱいの素晴らしさに触れていないだけなんだ。だから俺達は彼らにそれを伝えるため、今日こうして集まってもらったんだろう？」

「し、司令……」

「俺達が間違っていました！」

いい話っぽくまとめようとするハヤトだが、正直欠片もいい話じゃない。

その証拠に、リオス達はドヤ顔のハヤトとそれに感動しているルーク、ユウキを見てドン引き中だ。しかし、ハヤトはそんなリオス達は気にせず、ドヤ顔を保ったままに宣言した。

「では始めよう。第2次スーパーおっぱい大戦Z　く破界編くをな
！」

「いや、第1次をやった記憶が無いんだけど」

「つか俺達やるなんて一言も言っただけぞ」

「始めるぞ！」

「「おー！」」

「「「聞けよ！！」「」「」」

リオス達の悲痛なツッコミは華麗にスルーされ、ここに第2次スーパーおっぱい大戦Z　く破界編くが開催されようとしていた。

何ともいえない表情をしたリオス、京谷、アウル、アルトリアの4人を巻き込んで。

……ちなみに、京谷とリオスは物陰でこっそり胃薬を飲んでいた。

●陸士訓練学校のドタバタな日常。

第7話 『。。。』。おっばい！おっばい！』

「……………はあ」

「ん？ どうしたリオス。お前だっておっばいは好きだろう？

今日は存分に語ってくれていいんだぞ。なあに遠慮するな、俺たち幼馴染だろ！」

深々と溜息を吐くリオスに、ルークが爽やかな笑顔でサムズアップする。

溜息の理由は全く違うのだが、それをこうなったルーク達に言うだけ無駄だという事は、この場に居るほかの誰よりもリオスが良く知っている。伊達に16年も幼馴染はやっていない。

「うん、それはもうどうでもいいんだけどさ。それって教室でやってたら後で殺さるよね？

結構早い時間だけど、もう少ししたら流石に女子の皆も来ると思うしさ」

「それなら大丈夫だ。教室の外にサーチャーを配置しておいた。

もし女の子が近づいてきたら、すぐに俺達に知らせてくれるようになってる」

「久しぶりに全力でやったからな、準備は万端だぜ」

「よくやってくれた、同志ルーク、同志ユウキ」

ドヤ顔でサムズアップをしてみせるルークとユウキ、そして某司令のポーズをしたままニヤリと悪役的な笑みを浮かべるハヤト。ショートコントみたいな3人のやり取りに、リオスと京谷は深々と溜息を吐く。

何故その情熱を別の方向に向けられないのかと思うが、それが出来たら出来たでこの3人じゃないと思えてしまうのが悲しいところだ。

「あうあう、えっちいのはダメだよ」

「そ、そうですね。そういう話題はちょっと……」

一方のアルトリアとアウルの2人は、この手の話題が苦手なのか顔を赤くして戸惑った声を上げる。

しかし、それを聞いてくれるハヤト達ではないのは、他でもない本人達が一番良く知っているので半ば諦め気味ではあるのだが。

「お前らそれでも男か!? 男ならおっぱいへの情熱を語るくらいの度量を見せなくてどうする!」

「お母ちゃん、アンタをそんな風に育てた覚えはあらへんで！」

「おっぱいの神様に申し訳ないとは思わないのかあっ！」

「ど、どうしようリオス。ハヤト達が何言ってるのか分かんないよ
う」

「大丈夫。僕も全然わかんないから」

カツと目を見開いて怒鳴るハヤト達に、アルトリアはちょっと涙目になってリオスに助けを求めた。そして助けを求められたリオスは、アルトリアを宥めるように軽く肩を叩き、悟りきった笑顔を浮かべている。そこに浮かぶ表情は、仏ではないのかと錯覚させるほど自愛に満ちていたという。

「アウル、お前も諦めた方がいいぞ。ああなったら、俺でもそうそう止められねーし」

「ですよね……ええ、分かってました。分かってましたとも」

アウルはアウルで、苦笑する京谷に言われて思い切り肩を落としている。

まあ、苦手とは言ってもアウルだって思春期の男の子。興味が無いという事は決してあり得ない。と、そんなこんなでリオス達はハヤト達に丸め込まれ、ここに第2次スーパーおっぱい大戦――破界編――が始まった。

「とはいっても、ここに居る奴等って、ハヤト以外は特に好みとかないんだよなあ」

「俺は自他共に認める、生粋の巨乳信者だからなー!」

「知ってるっつーの。なんせ訓練校に入った初日の自己紹介で、『ただの乳には興味ありません! この中に巨乳、爆乳、大きなおっぱいが居たら俺のとこまで来なさい!』とか言っつて、その場で左教官にぶん殴られた男だしな」

「アレにはホント呆れたよ」

「おいおいそんな誉めんなって。照れるだろー」

「「誉めてないから」」

呆れた声でハヤトの恥ずかすぎる過去を語る京谷と、何度も頷いてそれに同意するリオス。

そんな3人を他所に、ルークとユウキは顔を赤くしているアウルとアルトリアを巻き込んでおっぱい談義に花を咲かせていた。

「まあ個人的にコレってのは無いけどさ、貧乳って結構いいなーと思うわけよ」

「そうかあ? 俺は美乳もいと思うが。なあアウル?」

「わ、私に振らないくださいよ。
大体、女性をそういう一部分だけで評価するのはどうかと思います」

「そうだよ！ おっぱいだけで女の子を評価するなんて間違ってる
ってば！」

アウルの発言に我が意を得たりと目を輝かせ、アルトリアが反論
を返す。

けれど悲しいかな。変なギアが入っているルーク達に、彼等の反
論は全く意味を成さなかった。

「いいからさつさと答えろよ。俺が思うに、アリアは訓練中にエ
リス教官見てるから、結構巨乳好きだと思っただよな。アウルはア
ウルで、蒼とか見てるところから考えるに貧乳好きがする」

「ななな、何でそんなの知ってるわけ！？」

「べ、別に見てませんから！！ 気のせいですから！」

「そこでそうやって必死に否定する時点で、認めてるようなもんだ
ろ」

ニヤニヤ笑っているルーク達にツッコまれ、より一層顔を赤くし
て焦りまくるアウルとアルトリア。

そういうリアクションをするから余計に絡まれるのだが、初心な
2人に対してこの手の話題で動揺するなというのは、少しばかり酷

だろうか。

「大丈夫だって、この場で何を言ってもそれをネタにからかったりしねーから」

「そうそう。男しくないんだから、もうちょい素直になれって」

「ううう……」

「そういう問題じゃなくてですね……」

「これ以上ゴネるなら、お前らは女なら何でもいいという噂を訓練校中に流す」

「それはやめて!」

ルーク達がそんな感じで2人を弄っていると、ショートコントを終えたハヤト達が戻ってくる。

「ハヤトはホント自重しようよ。この際ほんの少しでいいから」

「え？ 俺今でもすっぱー自重してる方なんだけど。俺が自重しなくなったら凄いよ？」

「なにそれこわい」

「それこそ顔を合わせた瞬間に、ソフィアのわがまま口リ巨乳を気

が済むまで揉み解すよ?。」

「ンなことしたら、問答無用で管理局に突き出すからな」

セクハラを超えて、もはや性犯罪レベルの発言をするハヤトに、京谷は怒りとも呆れとも言えない何とも微妙な顔をして頭を押さえた。冗談だとは思うのだが、そうだと断言できないのが困る。

「おー、戻ってきたかハヤト。なあ聞いてくれよー、アウルとアリアが好みのおっぱいを答えてくれねーんですけど。なにコイツら、カマトト振りやがって!!」

「いい子ぶってんじゃねーぞ! このむつつりスケベが!」

「なんか酷い言われよう!?!」

「恥ずかしくて答えなかったただけなのに!」

戻ってきたハヤト達を見て、ルークとユウキはペツと唾を吐きながらアウル達を罵倒する。もちろんその罵倒は見当違いどころか逆恨みレベルなので、言われたアウルとアルトリアは驚愕するばかりだ。

それを見て、リオスと京谷は「気の毒に……」と沈痛な表情で俯いた。

「おっぱいの好みを答えるのが恥ずかしい!?! 舐めてんのかお

前らは！」

「そうだそうだ！ その程度も答えられずに、管理局員になれると思つてんのか！？」

「この程度で恥ずかしいとか、これから先マトモに生きていけねぞ！」

リオス達がそうしている間にも、ハヤトを加えたエロ三人衆はヒートアップしてアウル達を追い詰めていく。言つてゐることは支離滅裂なのに、迫力のせいで何故か正しい事を言つてゐるように聞こえてしまうのが恐ろしすぎる。

そして、それを間近で聞き続けているうちに、どうやらアウルとアルトリアも洗脳されてきてしまったようで……。

「そ、そうなんでしょうか？ それなら、恥ずかしいけど答えたほうが……」

「うん。俺も恥ずかしいけど、答えた方が良いんだよね？」

とかなんとか、ハイライトの消えた虚ろな目で呟いていた。勢い任せで人を洗脳できるとか、まるで悪役みたいなさ人組だ。

「さあ答えるアウル！ アリア！ 巨乳？ 貧乳？ 美乳？ 何でもいい！？」

「今夜の！」

「ご注文は！」

「「「DOCCCHI!？」」」

今や懐かしい某料理番組の決まり文句が決め手となったのか、アウルとアルトリアの2人は虚ろな目のまま暫く考え、それぞれに口を開く。

「そうですね、私は“美乳派”だと思います。やはり形が綺麗な方が良いですし」

「うーん……………“何でもいい”かな？」

好きになった人のなら、胸の大小は気にならないと思う」

「「「YEAHHHHH!!!!」」」

「「うおおい!？」 2人とも何マジメに答えちゃってんのおおおお!？」」

大真面目な顔で答えた2人に、ハヤト達は立ち上がって大喜びし、リオスと京谷は驚愕の表情で思いつきりツツコミを入れた。けれど盛り上がっているハヤト達に、そのツツコミは届かない。

こういう場合、間違いなく苦労するのは真面目な人間なのは自明の理。

そしてリオスと京谷は、その苦労する側の人間なのだ。

「いやあ、アウルが美乳派とは嬉しいねえ。今夜はいい酒が飲めそうだ!」

「はははっ。恥ずかしいですけど、こういうのもたまには良い物ですね。あ、でもお酒はダメですよ。

私もユウキさんも、まだ未成年なんですから」

「アリアが“何でもいい”ってのは驚いたけど、理由を聞いたら納得できんなあ。

まったく純情な奴だぜ、お前は」

「い、いいじゃんか。女の人を胸だけで判断するのは、よくないんだよ!」

「素直になれよアリア! おっぱいは人類の至宝だ! それを区別無く愛するってのはな、男として誇っていいことなんだぜ!? もっと胸を張れ!」

「……そ、そうだね。胸を張っていいんだよね!」

どうやら完全にハヤト達の勢いに押されて洗脳されてしまったらしく、アウルとアリアは顔を赤くしたままではあるが、ルークやハヤト、ユウキと和気藹々と話している。

間違いなく後で思い出して後悔すること請け合いだろうが、今この瞬間それは関係ない。

彼等にとってこの一瞬は、間違いなく青春のページなのだ。

……間違いなく黒歴史だろうけどな！

「京谷、どうする？」

「巻き込まれる前に逃げるのが得策だろうな。もう俺らじゃ止められん」

「だよな〜……」

円陣を組んで騒いでいるハヤト達を見て、リオスと京谷は頬を引き攣らせた。

下手にツツコミを入れようものなら、間違いなく今度の標的は自分達だ。このまま放っておけば、少なくとも自分達に害は無いのだから関わるだけ損というもの。

そう結論付けた2人は、ハヤト達に気付かれぬうちに教室から出て行こうとした。

「おーーっ！とオ！ どこに行こうってんですか、リイイイイオスくんよオ！？」

「悪リイが……こっから先は一方通行だ。脱出は禁止ってなア！！」

「狩人を楽しませるならキツネになれよ！

食われるだけの豚で止まってんじゃねーぞ！ 三下アアア！」

「逃がさないよ、リオス、京谷！」

「一緒に楽しく語ろうじゃないですか！」

しかし、彼等が出て行くための第1歩を踏み出した途端、一瞬でハヤト達に囲まれてしまう。

更にご丁寧なことに、アウルとアリアは教室の窓やドアなど、逃げられそうな場所全てに結界魔法を張っているという徹底ぶり。これを一瞬でやってのけたと言うのだから驚きだ。

これが模擬戦だったなら、間違いなく最高判定を貰えるレベルの連携である。

「えー……何なのこのチームワークの良さ」

「お前らこんな時ばっか素晴らしい団結力発揮してんじゃねーよ！その団結力を、模擬戦やる時にもうちよつと使おうって気はないのかコラア！！」

「……そんなものは無い！！」「……」

「言い切んのかよ！」

「しかもアウルとアリアまで一緒になって！？」

もはや洗脳は完全に完了したらしく、常識人だったアウルとアルトリアの面影はどこにも無い。

その事に泣きそうになりながら、それでもリオスと京谷はツッコミを入れてしまう。リオスは16年という年月によって、京谷はこ

のクラスの委員になってからの月日によって、もはや脊髓反射的にツツコミを入れてしまう体質になってしまったのだ。

なんという悲劇。

「ああもう、わかったよ。俺らも話せばいいんだろ。話せば」

「ええ！？ 諦めちゃうの京谷！？」

「落ち着けリオス。お前、ここを抜けられる自信あるか？」

「アウルとアリアも洗脳されてあっちについてる、5対2つつー状況で」

「う……それを言われると……」

「だったらもう諦めて参加しようぜ。男同士でこういう話すんのも、たまにはいいだろ」

肩を竦めて苦笑する京谷の言葉に、リオスは何か反論しようと口を開きかけ、けれど反論しても仕方が無いと思ったのだろう。溜息を吐いて苦笑を漏らした。

「はあ………うん、そうだね」

「お、リオスも京谷も乗り気になったか！」

「よっしゃー！ それじゃあとことん語り合おうぜ！ まずは貧乳

達が勢ぞろいしていた。

表情と程度の差はあれ、そこに居る全員が顔を真っ赤にして俯いている。中でもミコトと蒼、ゆずとティアナの4人はプルプルと肩を震わせている。

何故彼女達がここに居るのか。

それは別にハヤト達が時間を忘れて語り合っていた訳ではなく、勿論ティアナ達がハヤト達の動向を嗅ぎつけた訳でもない。ただ偶然、彼女達が早めに登校した……それだけの事だ。

サーチャーもさつきからずっと彼女達の気配を察知し、サーチャーを仕掛けたルークとユウキに警告を送っているのだが、それを仕掛けた本人達は話す事に熱中すぎて、まったく気付く気配が無い。……何のためのサーチャーやねん。意味が無いにも程があるだろ。

「あうあう……」

「ま、まだ成長期なだけだもん。これから大きくなるんだもん」

「美乳って……喜んでいいのかなあ？」

顔を赤くして、照れたり涙目になっているソフィア、美卯、スバルの3人。

なんとも初々しく、可愛い反応だ。もしこの現場を誰かが見たら、間違いなく一目惚れしてしまうだろう。

「な、何を大声で叫んどるんじゃ、あやつらはああ……！」

「貧乳？ あたしが貧乳だと？ ……いいわ、ならその幻想をぶつ殺してあげる」

「ふふふ、まさかこんな登校して早々、こんな屈辱を受けるハメになるとはな」

「男連中が全然居なかったから、おかしいなと思っていたけど……」

そんな3人とは対照的に、俯いていた顔をゆっくりと上げ引き攣った笑いを浮かべる4人。

どう考えてもマジギレ中です。本当にありがとうございました。

そして、そんな4人の怒りの炎に油……どころかダイナマイトを放り込むようなハヤトとルーク、ユウキの声が、教室の中から聞こえてきた。

「まあどんだけ美人でも、あんなガキ臭い奴等はごめんだけどなー（笑）」

「「言えてる言えてる（笑）」」

ハヤトが呟いたその台詞は、ティアナ達4人の中に残っていたなけなしの理性を粉碎した。

「「「「「よろしい、ならば戦争だ」」」」」

その後ハヤト達がどうなったのか……それを語る術を私は持たない。

ただ、この日教室に入ってきた舞は、開口一番こう言ったという。

「……………なんで男連中が死んでる訳？ 別にいいけど」

ちなみにハヤト達はこの後暫く、クラスのマスコットの存在であるソフィアから、顔を合わせるたびに「えっちなのはダメだからね！」と注意され、恥ずかしさと気まずさで暗鬱とした日々を送る事になったという。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた……ごめん嘘。

・ 今回のおまけ

【あるあるネタ その1】

ハヤト「今日の朝さ、クラス中の女子から告白される夢見た」

ユウキ「俺もー」

ルーク「俺もだな」

ハヤト「なんだ、あるあるネタか」

京谷「あるある……？」

【自重は大事】

アウル「な、何であんな話し合いに参加しちゃったんでしょう、私は……」

アリア「ねえ……場の勢いって怖いね。ティアナ達にも凄く怒られ

ちゃったし」

アウル「暫くは、ハヤトさん達にも自重してもらわなくては」

アリア「うん。京谷やリオスに頼んで、もっと監視して貰うようにするよ」

リオス「え？ 僕なの？」

アウル・アリア「もちろん」

リオス「……胃薬買ってきます」

【あるあるネタ その2】

ハヤト「パンを啜えた美少女と、曲がり角でぶつかって」

ルーク「空から突然羽を生やした美少女が降ってきて」

ユウキ「自称アンドロイドの女の子が、突然我が家にやってきて」

舞「……アンタ等、それが遅刻の理由だと？」

ハ・ル・ユ「「何か問題でも？」」

舞「ちよつと屋上来い」

第7話 『（・・・）〇ミ。おっぱい！おっぱい！』（後書き）

次回は授業風景と言ったな。アレは嘘だ。
どうも、ラモンです。

女子の皆は微妙なところですが、今回はクラスメート全員登場させてみました。

……うん、多すぎる。こんなに動かせない（汗）
身の丈にあつた事をするのが大事って事を思い知りました。

まあそれはさておき、今回は男子連中に馬鹿やらせてみましたが、
どうだったでしょうか。

まあ、流石にちよつと悪ノリが過ぎた気もしてますから、怒られる
覚悟は完了しています。作者の皆様、「お前ふざけんなよ！」とい
う苦情などございましたら、遠慮なくどうぞ。

次回は……次回こそ授業風景やりたいですね。
基礎訓練、実戦訓練、座学訓練の3つを、3話を使ってやってみ
たいところです。

今回みたいに、全然違う話になる確率も高いですが（笑）

それではまた、次の話で。

応募して頂いたキャラクターの扱い、設定などで問題や間違いが
ありましたら、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。
出来る限り修正します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5850x/>

陸士訓練学校のドタバタな日常

2011年12月7日22時48分発行